

## 第8章 本研究で明らかになったこと（結論）

本章では、構造を構成する要素として、受身文のさまざまな特徴に着目し、「意味・構造的なタイプ」を取り出すという本研究の方法論によって明らかになったことをまとめて述べていく。分析の中で明らかになったことには、大きく、意味・構造的なタイプの相互関係、主語の有情・非情の別による違い、従来指摘されてきた受身文タイプについて気づいたことの3つがある。それぞれ、具体的な現象を挙げながら項目ごとに説明していく。

そして、本章の最後に、現時点で論者（志波）が把握している本研究の分類の問題点を今後の課題として提示したい。

### 1 意味・構造的なタイプの相互関係—受身文の体系—

本節では、本研究で立てた受身文の意味・構造的なタイプの相互関係について述べていく。それぞれの意味・構造的なタイプは、ある構造的な条件の下で、他のタイプに近づき、移行する関係にある。この移行は、一方向的な場合もあるし、双方向的な場合もある。

以下では、まず、本項で取り出したすべてのサブタイプをリストとして提示する。次に、受身文の4大分類、15中分類、サブタイプの順に、どのような移行関係があるかについて詳細に見ていく。

#### 1.1 受身文の全サブタイプ

本研究では、15中分類を、動詞のより詳細な語彙的な意味（カテゴリーカルな意味）によってさらに細分類した。以下に、取り出したすべてのサブタイプをリストとして示す。リストには、意味・構造的なタイプの名称を挙げ、大分類と中分類には単純化した構造を枠囲いで示し、略称をカッコ内に記した。また、サブタイプには、名称の次に当該タイプの代表的な動詞によって構造パターンを簡単にカッコ内に記し、典型的な例文を1、2例挙げた。

**有情主語有情行為者受身文** AN-ガ AN-ニ V-ラレル (AA)**被変化型** AN-ガ AN-ニ 変化 V-ラレル (AA 変化)

- 被'随伴'型 (人ニ 場ニ 連テ行カレル型) 「彼に病院に連れて行かれる」  
 被'位置変化'型 (場ニ 運バレル型) 「押入れに閉じ込められる」「病院に運ばれる」  
 被'生理的变化'型 (人ニ 殺サレル型) 「子供にひっくり返される」  
 被'心理的变化'型 (人ニ ダマサレル型) 「彼に裏切られる」  
 被'社会的状態変化'型 (逮捕サレル型) 「警察に逮捕される」「親に勘当される」  
 被'所有関係変化'型 (人ニ 物ヲ 渡サレル型) 「彼に手紙を手渡される/金を盗まれる」  
 被'所有物の変化'型 (人ニ 物ヲ 壊サレル型) 「子供に花瓶を壊される/絵を汚される」  
 被'強制使役'型 (人ニ 働カサレル型) 「母に無理に食べさせられる/働かされる」

**被動作型** AN-ガ AN-ニ 無変化 V-ラレル (AA 無変化)

- 被'接触'型 (人ニ タタカレル型) 「父親に(頬を)なぐられる」  
 被'催促'型 (人ニ ソソノカサレル型) 「彼にそそのかされる」  
 被'相手への動作'型 (人ニ 物ヲ 投ゲラレル型) 「おばさんに水をかけられる」

**被認識活動型** AN-ガ AN-ニ 認識 V-ラレル (AA 認識)

- 被'知覚認識'型 (人ニ 見ラレル型) 「彼に(顔を)見られる」  
 被'知的認識'型 (人ニ 事ヲ 知ラレル型) 「彼に素性を知られる」  
 被'相手言語活動'型 (人ニ ～ト 言ワレル型) 「彼に-を/について/～と言われる」  
 被'相手提示'型 (人ニ 物ヲ 見セラレル型) 「彼に手紙を見せられる」

**被態度型** N-ガ AN-ニ 態度 V-ラレル (AA 態度)N-ガ AN-ニ ～ト 認識 V-ラレル**被'認識的態度'**

- 被'感情=評価的態度'型 (人ニ 嫌ワレル型) 「彼に/から愛される/疎まれる」  
 被'知的態度'型 (人ニ ～ト 思ワレル型) 「彼に～と思われる/見られる」  
 被'表現的態度'型 (人ニ 叱ラレル型) 「彼に褒められる」「彼に…を～と言われる」  
 被'呼称的態度'型 (人ニ 名ト 呼バレル型) 「彼に～と呼ばれる/名づけられる」

**被'動作的態度'型**

- 被'評価動作的態度'型 (人ニ イジメラレル型) 「彼にかわいがられる/助けられる」  
 被'相手要求的態度'型 (人ニ 事ヲ 頼マレル型) 「彼に掃除を頼まれる」  
 被'接近的態度'型 (人ニ 追ワレル型) 「彼に追いかけられる/記者に取り囲まれる」  
 被'相手への態度'型 (人ニ ソムカレル型) 「彼にそむかれる/干渉される」

**被'はた迷惑'型** AN-ガ AN-ニ VI-ラレル, AN-ガ AN-ニ N-ヲ VT-ラレル (AA 迷惑)

「死なれる」「癩癩を起こされる」「うろうろされる」

**有情主語非情行為者受身文** **AN-ガ IN-ニ V-ラレル** (AI)**状態型** (AI 心理)

- 心理・生理的状态型 (事ニ 悩マサレル型) 「生活に追われる」「病におかされる」  
 陥る型 (状況ニ 置カレル型) 「状況に追い込まれる」「事件に巻き込まれる」  
 不可避型 (事ヲ 迫ラレル型) 「コスト削減を迫られる/余儀なくされる」

**非情主語一項受身文** **IN-ガ V-ラレル** (I1)**事態実現型** **IN-ガ V-ラレル** (I1 実現)**変化型** **IN-ガ 変化 V-ラレル** (I1 変化)

- 状態変化型 (壊サレル型) 「森林が伐採される」「家族形態が単純化される」  
 位置変化型 (場ニ 送ラレル型) 「空港に看板が掲げられる」「脳から全身に指令が送られる」  
 所有変化型 (人ニ/カラ 与エラレル/取ラレル型)  
   譲渡型 「オリーブの冠が勝者に与えられる」「女性に選挙権が与えられる」  
   奪取型 「美術館の絵画が盗まれる」「戦後の復興政策により、秩序が取り戻される」  
 結果型 (作ラレル型) 「丘の上に教会が建てられる」「文化が形成される」  
 表示型 (場ニ 表示サレル型)  
   表示型 「画面に絵が表示された」「経済に回復軌道が示される」  
   公開型 「チームのメンバーが発表された」  
 実行型 (行ワレル型)  
   行事实行型 「運動会が行われる」「会議が開かれる」  
   動作実行型 「経済再建がなされる」「議論が行われる」  
   出来事の局面型 「自由民権運動が開始される」「祭りが中止される」

**無変化型** **IN-ガ 無変化 V-ラレル** (I1 無変化) (打タレル型)

- 「鐘が一斉に鳴らされた」「ドアが叩かれた」

**認識活動型** **IN-ガ 認識 V-ラレル** (I1 認識)

- 知覚認識型 (物ガ 見ラレル型) 「細胞分裂が観察される」  
 知的認識型 (事ガ 考エラレル型) 「早急な対策が考えられる」  
 発見的認識型 (発見サレル型) 「山中で死体が発見される」  
 言語活動型 (人ニ 事ガ 伝エラレル型) 「事件のいきさつが述べられる」

**態度型** **IN-ガ N-ト 思考/処遇 V-ラレル** (I1 態度)

- 判断型 (~ト 見ナサレル型) 「この件に関しては対策が必要だと認められた」  
 意義づけ型 (意義ニ/ト サレル型) 「見本に/とされる、使われる」  
 要求型 (動作ガ 求ラレタ型) 「委員会に対策が求められた」  
 表現型 (描カレル型) 「人物が描かれる」「この現象は次の反応式で表わされる」

**存在型** **N-ニ IN-ガ V-ラレテイル** (I1 存在)

- 存在様態受身型 (場ニ 物ガ 置カレテイル型) 「机の上に手紙が置かれている」

- 抽象的存在 (Nニ事ガ置カレテイル型) 「分類に比重が置かれている」  
 抽象的所有型 (人ニ事ガ与エラレテイル型) 「彼らには多くの機会が与えられている」  
 存在発見型 (場ニ物ガ発見サレル型) 「雲の間に黒い線が認められる」  
 存在確認型 (Nニ事ガ見ラレル型) 「多くの国に共通の現象が見られる」

## 習慣的社会活動型 N-ハ V-ラレル/ラレテイル (I1 社会)

### 社会的認識型

- 社会的思考型 (～ト思ワレテイル型)  
 社会的対象思考型 「縄文時代には、靈魂の存在が信じられている」  
 社会的判断型 「多くの行動は生まれつきと思われている」  
 社会的言語活動型 (～ト言ワレル型)  
 社会的対象言語活動型 「近年、経済格差がさかんに言われている」  
 社会的判断言語活動型 「近年、日本では格差が拡大したと言われている」  
 社会的呼称型 (～ト呼バレル型) 「このビルはランドマークと呼ばれている」  
 社会的評価型 (好マレル型) 「この政策は非常に重要視されている」  
 社会的関心型 (事ガ求メラレル型)  
 活動への社会的関心 「本部の対応が注目されている」  
 結果への社会的関心 「いい結果が期待されている」  
 あり方への社会的関心 「国政の真価が問われている」  
 社会的約束型 (事ガ許サレル型)  
 社会的規制型 「子供の入場は禁止されている」  
 社会的保障型 「国民の人権は守られている」

### 社会的処遇型

- 社会的意義づけ型 (意義ニト扱ワレル型) 「鉛白は白粉に使われる」

## 超時的事態型 IN-ハ V-ラレル/ラレテイル (I1 超時)

- 特徴規定型 (恵マレタN) 「箱の中は4つに仕切られていた」「煮込み用に作られた鍋」  
 論理的操作型 (Nニ分ケラレル型) 「水溶性物質は2つのグループに分類される」  
 限定型 (限ラレル型)  
 条件限定型 「製品化されるのは小型のものに限られる/制限されている」  
 縮小化型 「生産量はかなり限られる/抑えられている」

## 非情主語非情行為者受身文 N-ガ IN-ニ V-ラレル (II)

### 現象受身型 (風ニ吹カレル型) IN-ガ 現象 N-ニ V-ラレル (II 現象)

「山が雲に覆われる」「樹々が風に吹かれる」

### 関係型 (II 関係)

- 位置関係型 (物ニ囲マレテイル) 「この国は海に囲まれている」  
 論理的关系型  
 内在的关系型 (Nニ含マレル型) 「イチゴにはビタミンCが豊富に含まれる」  
 構成的関係型 (Nカラ構成サレル型) 「委員会は5人の議員から構成されている」  
 象徴的关系型 (Nニ象徴サレル型) 「高度経済成長は東京オリンピックに象徴される」  
 継承関係型 (Nニ受ケ継ガレル型) 「昔ながらの風景が白川郷に受け継がれている」  
 影響関係型 (事ニ左右サレル型) 「人の性格は環境に左右される」

ここで先にサブタイプをリスト化して提示したのは、大分類と中分類における移行関係を見る際にも、サブタイプの中の相互関係を鑑みなければならないからである。

## 1.2 4大分類の相互関係

まず、4大分類について、その移行関係を簡単に説明しよう。ただし、有情有情受身文と非情一項受身文の相互関係については、次の「1.5 中分類の相互関係」の中で詳しく述べることにして、ここでは主に有情非情受身文と非情非情受身文の、他のタイプとの相互関係について述べる。

### 1.2.1 有情主語非情行為者受身文と他の受身文タイプ

有情非情受身文のサブタイプである〈心理・生理的状态型 (AI心理)〉については、第2章 1.1.2 でも詳しく述べたが、ここで再び簡単に説明する。〈心理・生理的状态型〉は、有情者が主語に立つという点で有情有情受身文と共通しているが、二格に立つ行為者が非情物の原因であるか、有情者の動作主であるかという点で根本的に対立している。〈心理・生理的状态型〉は、原因の二格名詞句をとるという点では、自然動詞文に非常に近いところにある。

- (1) わたしは、和夫にぶたれた。〈有情有情受身文 (被接触型)〉  
 (2) a. わたしは、彼女の態度に驚かされた。〈有情非情受身文 (心理・生理的状态型)〉  
 b. わたしは、彼女の態度に驚いた。〈自然動詞文〉

一方で、物理的作用動詞が心理・生理的状态を表わす例も少なくなく、一部の接触動詞や接近的態度動詞が有情非情受身文の要素となることがある。これは、有情有情受身文のサブタイプである〈被接触型 (AA無変化)〉ないし〈被接近的態度型 (AA態度)〉の二格名詞句に非情物 (抽象名詞) が立つことで、有情非情受身文のサブタイプである〈心理・生理的状态型〉へ移行した結果である。

- (3) a. わたしは、彼女に {打たれた / 押された / 足を縛られた}。〈有情有情受身文 (被接触型)〉  
 b. わたしは、彼女の {美しさに打たれた / 勢いに押された / 存在に縛られている}。〈有情非情受身文 (心理・生理的状态型)〉  
 (4) a. わたしは、彼に {迫られた / 追われた}。〈有情有情受身文 (被接近的態度型)〉  
 b. わたしは、{必要に迫られて / 焦燥感に見舞われて / 仕事に追われて} それを買った。〈有情非情受身文 (心理・生理的状态型)〉

また、かなり慣用的ではあるが、「違和感を与えられる」、「心を奪われる」、「気をとられる」というように、所有変化動詞がヲ格に内的心理を表わす名詞句をとることで、〈心理・生理的状态型〉へ移行することもある。

このように、有情有情受身文のサブタイプのいくつかは、二格 (やヲ格) に抽象名詞ないし現象名詞が立つことで有情非情受身文に移行する。この有情有情受身文と有情非情受

身文は、前者が物理的動作を表わし<sup>248</sup>、後者が心理・生理的状态、つまりより抽象的な作用を表わすことから、両者の移行関係は一方向的である。すなわち、有情有情受身文から有情非情受身文への移行のみが存在する。また、多くの場合、物理的動作動詞で構成される(3)や(4)のような〈心理・生理的状态型〉は、対応する能動文で述べると不自然であるか、まったく非文になってしまう。これは、こうした移行関係が、受身文の体系に特有のものであることを意味している。

なお、有情非情受身文の他の2つのサブタイプである〈陥る型〉と〈不可避型〉については、生産性が低く、頻度も高くない上、動作主の性質も〈心理・生理的状态型〉とは異なるため、ここでは取り上げない。〈陥る型〉と〈不可避型〉は、動作主が想定不可能であるという点をもって有情非情受身文に位置づけており、二格の原因である非情物名詞と共に起するわけではない。よって、有情有情受身文の周辺に位置づけるべきタイプとも考えられ、今後、検討が必要である。

### 1.2.2 非情主語非情行為者受身文と他の受身文タイプ

次に、非情主語非情行為者受身文であるが、この下位タイプの代表的なものに〈現象受身型(II現象)〉がある。現象受身型は、二格に自然現象を表わす名詞が立つ受身文で、「雨に降られる、雲に覆われる」などの受身文である。〈現象受身型〉を構成する動詞は、ほとんどが接触動詞ないし包囲動詞といった、対象を変化させない無変化作用動詞である。また、このタイプの主語には有情者、非情物のいずれも立ちうるが、二項受身文であることから、有情有情受身文との派生関係を想定するのが妥当かと考える。よって、〈現象受身型〉にも、先の〈心理・生理的状态型(AI心理)〉同様、〈被接触型(AA無変化)〉及び〈被接近的態度型(AA態度)〉との移行関係が考えられる。

(5) a. 彼は、彼女に打たれた。〈有情有情受身文(被接触型)〉

b. 落ち葉が風に吹かれ、陽に照らされて、舞っている。〈非情非情受身文(現象受身型)〉

c. 彼は、雨に打たれ、陽に照らされながら、歩いていた。〈非情非情受身文(現象受身型)〉

(6) a. わたしは、学ランの男子に囲まれた。〈有情有情受身文(被接近的態度型)〉

b. 町は、霧に囲まれた。〈非情非情受身文(現象受身型)〉

接触動詞による〈現象受身型〉には、この他に「(雨に)打たれる、たたかれる、洗われる」、「(風に)あおられる、なぶられる、さらされる」などがあり、包囲動詞によるものには「(霧に)包まれる、囲まれる」などがある。

また、この〈現象受身型〉の二格名詞句は、自然動詞文にも現れる原因を表わす二格名詞句であり、〈現象受身型〉は自然動詞文に近いところに位置していると考えられる。この点でも〈心理・生理的状态型(AI心理)〉に共通している。

(7) 庭の花が雨に浸されている。(cf.ぬれている)

(8) 旗が風に吹かれている。(cf.なびいている)。

一方、非情非情受身文のもう一つのタイプである〈関係型(II関係)〉の移行関係は異

<sup>248</sup> 接近的態度動詞は態度動詞なので心理動詞に含まれるが、心理動詞の中でも「動作的な態度」を表わす動詞で、動作と心理の間に位置するような動詞である。

なっている。〈関係型〉とは、二格に非情物の行為者をとる、第3レベルの意味・構造的なタイプである。〈関係型〉には7つのサブタイプがあるが、ここでは分かりやすいものとして次の3つのタイプを取り上げる。

- (9) その街は、木立に{囲まれて／包まれて}いる。〈非情非情受身文（位置関係型）〉  
 (10) 委員会は5人の役員から構成されている。〈非情非情受身文（構成関係型）〉  
 (11) 高度経済成長は東京オリンピックに象徴される。〈非情非情受身文（象徴的關係型）〉

〈位置関係型〉については、第2章 1.1.2でも紹介したが、このタイプは有情有情受身文、非情一項受身文、非情非情受身文との移行関係を持っている。

- (12) わたしは、学ランの男子に囲まれた。〈有情有情受身文（被接近的態度型）〉  
 (13) 部屋は白い布で囲まれていた。〈非情一項受身文（状態変化型）〉  
 (14) 街は霧に包まれた。〈非情非情受身文（現象受身型）〉

また、〈構成関係型〉は、「構成される」のほかに「形成される、組み立てられる、形作られる」などの動詞が要素となるが、これはすべて作成動詞である。よって、このタイプは、非情一項受身文のサブタイプである〈結果型（I1変化）〉が抽象化することで派生したタイプと考えられる。次の例は〈結果型〉に位置づけたが、これらの受身文では抽象名詞が主語に立つことで、表わされる事態も抽象的であり、具体的な動作主が想定できない。一方で、点下線で示したように、当該事態を成立させる条件や原因が句や節の形で現れることがある。こうした条件や原因を主語にして、「包丁さばきが料理文化を形成した」「経験が新しい信号路を作る」「この試みの成功が新たな雇用を生み出す」という能動文と対立させるならば、これは論理的な関係の表現として〈構成関係型〉に移行していると見なすことも可能だろう。

- (155) 包丁さばきによって、料理文化が形成されていったといってもよい。(たべもの)  
 (156) そして、後天的につくられる脳機能、つまり条件反射は経験によって新しい信号路がつくられることを意味します。(記憶)  
 (157) この試みが成功すれば、不況の時勢の中、新たな雇用が生み出され、地域全体を活性化することができるかもしれない[後略]。(毎日)

最後に、〈象徴的關係型〉であるが、これは非情一項受身文の〈表示型（I1変化）〉と移行関係を持つようである。「示される」という動詞は、個別具体的な事態としては〈表示型〉を構成し、時間を越えた一般的なテンスで用いられると〈象徴的關係型〉を構成する。

- (15) a. 画面に文字が示された。〈非情一項受身文（表示型）〉  
 b. 日本経済に回復軌道が示された。〈非情一項受身文（表示型）〉  
 (16) a. 近代国家のイデオロギーは自由・平等の標語に示される。〈非情非情受身文（象徴的出現型）〉

以上を簡単に図にまとめると、次のようになる。

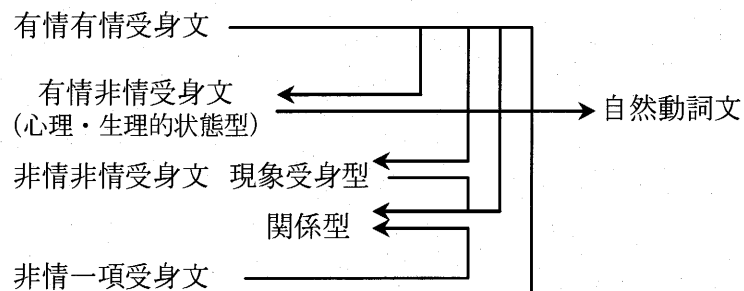


図 14：4 大分類の相互関係

図の矢印は一方向的な移行関係を表わし、矢印のない線は双方向的な移行関係を表わす。なお、有情有情受身文と非情一項受身文の相互関係については、次の「15 中分類の相互関係」の中で触れるが、両者の移行は基本的に双方向的である。〈位置関係型 (II 関係)〉の移行関係が複雑なので、図が若干見にくくなってしまったが、重要なことは、**非情非情受身文の〈関係型〉のみが非情一項受身文との派生的な相互関係を持っている**という点である。これに対し、有情非情受身文の〈心理・生理的状态型〉と非情非情受身文の〈現象受身型〉は、有情有情受身文とのみ派生的な相互関係を持っている。このことは、〈心理・生理的状态型〉と〈現象受身型〉を、いずれも有情有情受身文の周辺に位置づけることが妥当であるという可能性を示唆しているだろう。このことと関連して、有情有情受身文と〈心理・生理的状态型〉、及び〈現象受身型〉は、近世以前の日本語の受身文体系にも存在した、いわゆる「固有の受身」(松下 1930, 金水 1993) であると考えられる。一方、非情一項受身文と非情非情受身文の〈関係型〉は、近代における翻訳の影響で日本語の受身文体系に定着した受身文タイプであると考えられる。このことから、特に上の〈心理・生理的状态型〉や〈現象受身型〉における相互関係のような、比喩的な使用による派生という関係は、非情一項受身文においては未だ発達していないのではないかと考えられる。

このように、受身文の 4 大分類については、未だその分類のあり方に検討の余地が残されるが、本研究では主語と行為者の有情・非情の別という意味・構造的な特徴を優先させ、有情有情受身文、有情非情受身文、非情一項受身文、非情主語非情行為者受身文を、現代日本語受身文の 4 大分類とした。

### 1.3 15 中分類の相互関係

ここでは、15 中分類の相互関係について述べるが、主に、有情有情受身文と非情一項受身文との相互関係を述べることになる。先に、相互関係を図にしたものを示しておく。



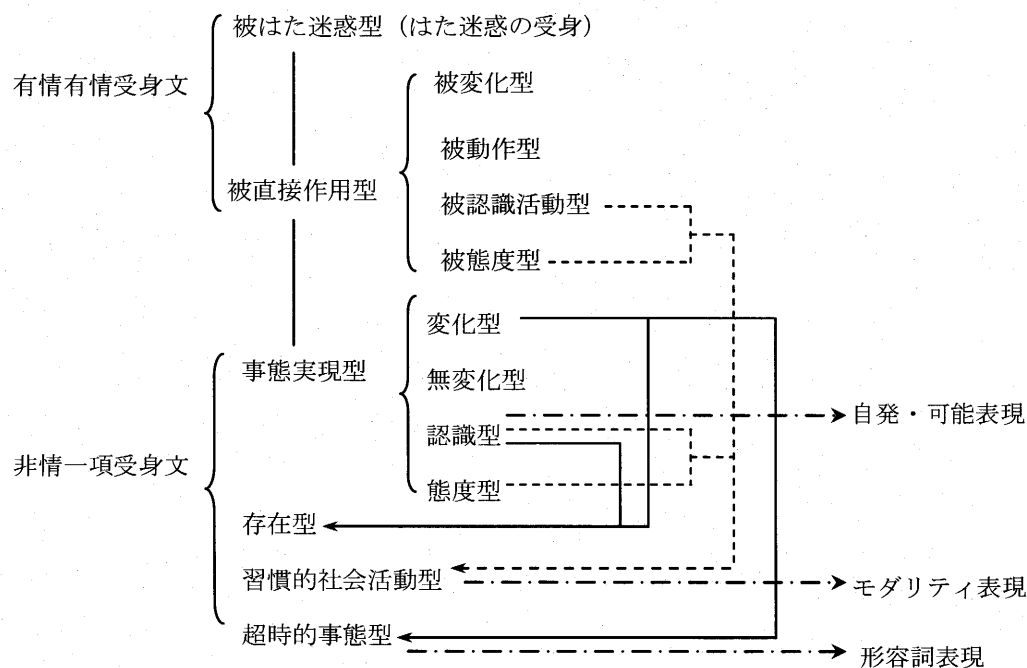


図 15 : 15 中分類の相互関係

上の図の線が実線か破線かということにあまり意味はない。線が混在しているので、見やすくするために分けた。

### 1.3.1 有情主語有情行為者受身文と非情一項受身文

有情有情受身文は、大きく〈被はた迷惑型〉と〈被直接作用型〉に分かれ、〈被直接作用型〉がさらに動詞の語彙的な意味によって、変化動詞による〈被変化型〉、無変化動詞による〈被動作型〉、認識動詞による〈被認識活動型〉、態度動詞による〈被態度型〉に分かれる。一方の非情一項受身文は、大きく〈事態実現型〉、〈習慣的社會活動型〉、〈存在型〉、〈超時的事態型〉に分かれ、〈事態実現型〉がさらに動詞の語彙的な意味によって、変化動詞による〈変化型〉、無変化動詞による〈無変化型〉、認識動詞による〈認識活動型〉、態度動詞による〈態度型〉に分かれる。よって、変化動詞、無変化動詞、認識動詞、態度動詞という動詞の語彙的な意味によるサブタイプは、有情有情受身文と非情一項受身文で、その対応関係は様々であるが、大きくは対応している。

例えば、有情有情受身文の〈被相手言語活動型〉は、発話相手の二格が主語に立つ受身文であるが、発話の対象が主語に立つと、非情一項受身文の〈言語活動型〉に移行する。これは、認識動詞である言語活動動詞における移行関係である。

(17) 山田課長は、部下から営業の結果を報告された。〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉

(18) 営業の結果が山田課長に報告された。〈言語活動型 (I1 認識)〉

また、接触動詞や位置変化動詞のように、対象に非情物も有情者も取りうる動詞では、有情者が対象である場合は有情有情受身文、非情物が対象である場合には非情一項受身文であるということになる。

(19) わたしは、和夫に（頭を）たたかれた。〈被接触型（AA 無変化）〉

(20) ドアがたたかれた。〈無変化型（I1 無変化）〉

このように、有情有情受身文の〈被直接作用型〉と、非情一項受身文の〈事態実現型〉とは、相互に対応するサブタイプがあり、双方向的に移行し合う関係にある。移行関係にあるすべての受身文タイプを表にしてまとめると次の表 39 のようになる。表は、有情者の相手が主語に立つか、非情物の対象が主語に立つかで対立するタイプ、有情者の対象が主語に立つか、非情物の対象が主語に立つかで対立するタイプ、有情者の持ち主が主語に立つか、非情物の対象が主語に立つかで対立するタイプの順に挙げている。

表 39：有情有情受身文と非情一項受身文の相互移行関係

|                     | 有情有情受身文（被直接作用型） ←                       | → 非情一項受身文（事態実現型）                 |
|---------------------|---|----------------------------------|
| 有情相手<br>vs.<br>非情対象 | 被'所有関係変化'型（AA 変化）<br>「良子が彼に手紙を手渡される」    | 所有関係変化型（I1 変化）<br>「良子に手紙が手渡される」  |
|                     | 被'相手への動作'型（AA 無変化）<br>「役人が子供に石を投げられる」   | 位置変化型（I1 変化）<br>「役人に石が投げられる」     |
|                     | 被'相手言語活動'型（AA 認識）<br>「良子が彼に N-を／～と言われる」 | 言語活動型（I1 認識）<br>「新たな問題が指摘される」    |
|                     | 被'相手提示'型（AA 認識）<br>「良子が彼に手紙を見せられる」      | 表示型（公開型）（I1 変化）<br>「良子に手紙が見せられる」 |
|                     | 被'相手要求的態度'型（AA 態度）<br>「本部は対策を求められた」     | 要求型（I1 態度）<br>「本部に（本部の）対策が求められた」 |
| 有情対象<br>vs.<br>非情対象 | 被'位置変化'型（AA 変化）<br>「良子が病院に運ばれる」         | 位置変化型（I1 変化）<br>「倉庫に積荷が運ばれる」     |
|                     | 被'接触'型（AA 無変化）<br>「父親に（頬を）たたかれる」        | 無変化型（I1 無変化）<br>「門がたたかれる」        |
|                     | 被'知覚認識'型（AA 認識）<br>「彼に（顔を）見られる」         | 知覚認識型（I1 認識）<br>「細胞分裂が見られる」      |
|                     | 被'知的態度'型（AA 態度）<br>「彼に異常と思われる」          | 判断型（I1 態度）<br>「部品が異常なしと見なされる」    |
| 持ち主 vs.<br>非情対象     | 被'所有物の変化'型（AA 変化）<br>「子供に花瓶を壊される」       | 状態変化型（I1 無変化）<br>「花瓶が壊される」       |
|                     | 被'知的認識'型（AA 認識）<br>「彼に過去を知られる」          | 知的認識型（I1 認識）<br>「過去が知られる」        |

一方で、対応関係があり得るのに、タイプとして取り出さなかった受身文タイプも存在する。それは、第3章3でも詳しく述べたが、態度動詞による受身文、すなわち、〈被態度型（AA態度）〉と〈態度型I1 態度〉である。対応する個別一回的な非情主語受身文がありうるにもかかわらず、非情主語受身文のタイプがない〈被態度型（AA態度）〉は、〈被感情=評価的態度型〉、〈被表現的態度型〉、〈被呼称的態度型〉、〈被評価動作的態度型〉である。この

うち、〈被呼称的態度型〉に対応する、個別一回的な呼称動詞の非情主語受身文については、2.2.4でも述べるが、手元のデータには用例が1例も見つからなかった。また、作例でも不自然な文となるため（「?そのビルは（市長によって）ランドマークと呼ばれた」など）、タイプを立てなかった。また、〈被感情=評価的態度型〉、〈被表現的態度型〉、及び〈被評価動作的態度型〉については、非情主語の受身文が数例存在したが、すべて有情者の広義所有物であったため、これらはすべて有情主語受身文の各タイプに含めた。

一方、〈態度型（I1 態度）〉のサブタイプである〈意義づけ成立型〉には、対応する有情主語受身文のタイプが存在しない。これは、手元のデータに見つかった有情主語の「意義づけ」の用例がすべて何らかの評価性を帯びていると判断し、〈被評価動作的態度型〉に分類したためである。次のような例がある。

- (21) 「そのほかに道はねえ、ぬすつとにされたまんまで生きちゃあいかれねえ、生きていかれるもんか、おらあきつと慥かめてみせるぞ」（さぶ）
- (22) 上級生と下級生と一緒にされてたまるもんじゃない。（榆家）
- (23) 彼らは院長夫妻と明瞭に血のつながりを持っている人たちなのだ。しかし、彼らはまだ晝生の部類に数えられ、書生と似たような生活を送ってきたのだ。（榆家・地）
- (24) 「井村はね、この前、痴漢と間違えられて、いや痴漢になりかかって警官に掴まったよ」（植物群）

しかし、より多くの用例を対象にすれば、有情主語であっても評価性に中立的な「意義づけ」の用例は存在しなくはない。今後、分類を修正していく余地がある。

### 1.3.2 被はた迷惑型への移行

〈被はた迷惑型〉は、いわゆる「はた迷惑の受身」に相当するが、このタイプは基本的に有情有情受身文の〈被直接作用型〉とのみ相互移行関係を持つと考えられる。

「はた迷惑の受身」とは、三上 1983 が提唱した受身文の1タイプであることは第1章 2.1.1 で詳しく述べた。三上 1983 にとって、「はた迷惑の受身」とは、構造的に対応する元の文にある成分が主語に立つのではない、自動詞からも成り立つ受身文で、かつ意味的にははたにいる者が迷惑を被ることを表す受身文を指す用語であった。しかし、その後の議論の中で、「迷惑」という意味は構造的特徴とは連動しない意味として扱われることとなった。すなわち、ここで言う「迷惑」の意味とは、「動詞の語彙的な意味になんら被害性がないにも関わらず、受身文になることで強い迷惑の意味を帯びる」場合の「迷惑の意味」を指している。例えば、次の例文における動詞は、その語彙的な意味には何ら被害性を含意しないが、受身文になることで強い迷惑性を帯びている。

- (25) a. 彼はわたしのことを1時間も待った。  
b. わたしは、彼に1時間も待たれた。
- (26) a. 山田さんは駅前で良子を見た。  
b. 良子は駅前で山田さんに見られた。

こうした受身文は、対応する能動文の直接的な成分が主語に立っているため、三上 1953 にとっては「まともな受身」だろう。しかしながら、久野 1983 や柴谷 1997a は、このように、直接受身文の構造を持つにも関わらず迷惑の意味を帯びる受身文の存在を問題にし、い

かなる条件で迷惑の意味が表れるのかという議論を展開している。両氏の主張は、簡単にまとめれば、「受身文の主語に立つ者がどれだけ事態に直接的に巻き込まれているかが、迷惑の意味の表れを左右する」というものである。

こうした議論は、〈被はた迷惑型〉と〈被直接作用型〉との移行関係を考える上でも参考になる。例えば、〈所有物の変化型 (AA 変化)〉は、いわゆる持ち主の受身であるが、このタイプでも、所有物の分離可能性が高く、所有者の事態への巻き込まれ性が低ければ、迷惑の意味を帯びやすく、〈被はた迷惑型〉へ移行していくだろう。

(27) 「[前略]こんな悪いやつに、自分の恥ずかしい手紙を読まれた。ぼくは死にたいですね。そのうえ、女のあなたにまで読まれた。なさけなくて涙がでそうですよ」(ドナウ)

(28) 二人は同じ町に住んでいたが、戦争中空襲で家屋を焼かれた。(植物群.地)

(29) 「だけど私がいかなきゃ、あのうちの整理は誰ができるんだよ。昨日みたいなアルバムなんか、藍子さんにみんな捨てられてしまう。あの人はものの価値がまるっきりわからないからね」(胡桃の家)

こうした、持ち主の受身とはた迷惑の受身との連続性は、従来から指摘されてきたことだが、後に 4.2 でも述べるように、いわゆる相手の受身でも、はた迷惑の意味を帯びる受身文が少なくない。例えば、言語活動動詞で構成される〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉には、「言われる、知らされる、聞かれる」などの動詞は頻繁に用いられるが、「話される、しゃべられる、語られる」などの動詞が用いられることはほとんどないだろう。

(30) a. 良子は和夫に旅行のことを {話した / しゃべった / 語った}。

b. 和夫は良子に旅行のことを {話された / しゃべられた / 語られた}。

所有変化動詞で構成される〈被所有変化型 (AA 変化)〉でも、「渡される、与えられる、託される」などの動詞では迷惑の意味を帯びないが、「売られる、貸される、払われる」などの動詞では、強い迷惑の意味を帯びる。

(31) a. 良子は和夫に本を {売った / 貸した}。

b. 和夫は良子に本を {売られた / 貸された}。

また、相手への態度を表わす動詞で構成される〈被相手への態度型〉でも、「そむかれる、おじぎされる、やさしくされる、なつかれる、干渉される」などでは、特に迷惑の意味は帯びないが、「会われる、従われる、慣れられる、学ばれる、協力される」などの動詞では、動詞の語彙的な意味に特に被害性がないにも関わらず、受身文になることで迷惑の意味を帯びる。

(32) a. 良子は和夫に {会った / 従った / 慣れた / 学んだ / 協力した}。

(33) b. 和夫は良子に {会われた / 従われた / 慣れられた / 学ばれた / 協力された}。

このほか、〈被相手提示型 (AA 認識)〉である「見せられる」などでも、受身文になることで迷惑の意味を帯びるようである。

このように、〈被直接作用型〉のサブタイプにおいて、動詞の語彙的な意味や所有物の分離可能性の高さによっては、当該のサブタイプが〈被はた迷惑型〉へ移行することがある。

### 1.3.3 存在型への移行

〈存在型〉は、〈存在様態受身型〉、〈抽象的存在型〉、〈抽象的所有型〉、〈存在確認型〉の4つのサブタイプに分けられる。それぞれ、次のような受身文である。

|         |                         |
|---------|-------------------------|
| 存在様態受身型 | 「窓際に花が活けられていた」          |
| 抽象的存在型  | 「この研究では動詞の分類に比重が置かれている」 |
| 抽象的所有型  | 「彼女には多くのチャンスが与えられている」   |
| 存在確認型   | 「多くの国に共通の現象が見られる」       |

この中で、〈存在様態受身型〉、〈抽象的存在型〉、〈抽象的所有型〉は、対象の存在場所である二格名詞句をとり、かつ動詞がラレテイル形になることで「存在」の意味を帯びている。これに対し、〈存在確認型〉は、対象の存在場所である二格名詞句をとり、かつ動詞が発見的認識を表わす動詞で動作主が不特定一般の人々であることで「存在」の意味を帯びている。

〈存在型〉は、意味・構造的なタイプのレベルで言えば第3レベルの意味・構造的なタイプであり、テンス・アスペクトや主題性といった特徴を構造の要素に含む、より抽象度の高いタイプである。よって、〈存在型〉には、第2レベルの意味・構造的なタイプである〈事態実現型〉に、対応するサブタイプがある。次の(34)は〈存在様態受身型〉に対応する〈変化型 (I1 変化)〉の受身文タイプ、(35)は〈抽象的存在型〉に対応するタイプ、(36)は〈抽象的所有型〉に対応する〈変化型 (I1 変化)〉である。それぞれ、動詞がラレテイル形になることで〈存在型〉の各サブタイプに移行する。

- (34) a. 窓際に花が活けられた。〈位置変化型 (モノの位置変化)〉  
 b. 公園には仮設トイレが設けられた。〈結果型 (モノの結果的出現)〉  
 c. 画面に文字が表示された。〈表示型 (モノの出現)〉
- (35) a. 動詞の分類に比重が置かれた。〈位置変化型 (コトの位置変化)〉  
 b. メンバーの間に信頼関係が形成された。〈結果型 (コトの結果的出現)〉  
 c. その言葉には彼女の強い意志が表された。〈表示型 (コトの出現)〉
- (36) 彼女には再びチャンスが与えられた。〈所有変化型〉

変化動詞による〈存在型〉の受身文は、テンス・アスペクト的に行為の実現の局面を捉えるものではなく、実現の後の状態を述べるものである。このため、〈事態実現型 (変化型)〉に比べ、動作主の具体性・特定性は非常に低いものになる。よって、〈変化型〉と〈存在型〉の移行関係も一方向的なもので、〈変化型〉から〈存在型〉への移行のみが存在すると考えられる。

〈存在型〉の残りタイプ、すなわち〈存在確認型〉は、認識動詞である発見動詞ないし知覚動詞から構成される。つまり、〈事態実現型〉の〈認識活動型 (I1 認識)〉と相互移行関係を持つ。次の〈知覚認識型〉と〈発見的認識型〉は、ともに〈認識活動型 (I1 認識)〉である。

- (37) 細胞分裂が観察された／見られた。〈知覚認識型 (I1 認識)〉  
 (38) 山中で死体が発見された。〈発見的認識型 (I1 認識)〉

〈存在確認型〉は、抽象名詞が主語に立つ場合が圧倒的に多く、動作主と時間の具体性に欠け、抽象性が高い受身文タイプである。よって、〈認識活動型 (I1 認識)〉から〈存在確認

型 (I1 存在) への移行は、一方向的であると言える。

### 1.3.4 習慣的社会活動型への移行

心理動詞による〈被認識活動型 (AA 認識)〉, 〈被態度型 (AA 態度)〉, 〈認識型 (I1 認識)〉, 〈態度型 (I1 態度)〉のサブタイプのいくつかは, 動作主が不特定多数の一般の人々になることで, 〈習慣的社会活動型〉へ移行する。動作主の一般化と連動して, このタイプのアスペクトは反復・習慣のアスペクトで述べられる。テンス・アスペクトにも特徴のある〈習慣的社会活動型〉は第3レベルの意味・構造的なタイプであり, より抽象度の高いタイプである。よって, 〈被認識活動型 (AA 認識)〉, 〈被態度型 (AA 態度)〉, 〈認識型 (I1 認識)〉, 〈態度型 (I1 態度)〉のサブタイプの, 〈習慣的社会活動型〉への移行は一方向的であると言える。〈被認識活動型 (AA 認識)〉, 〈被態度型 (AA 態度)〉, 〈認識型 (I1 認識)〉, 〈態度型 (I1 態度)〉のサブタイプと習慣的社会活動型の対応を表にしてまとめると次のようになる。

表 40: 習慣的社会活動型の各タイプに対応する個別具体的事態のタイプ

| 受身文タイプ<br>心理動詞             | 個別具体的事態                  |               | 習慣的事態               |
|----------------------------|--------------------------|---------------|---------------------|
|                            | 有情主語有情行為者<br>(AA)        | 非情主語一項 (I1)   |                     |
|                            |                          | 事態実現型         | 習慣的社会活動型            |
| 思考動詞                       | 被知的認識型<br>(AA 認識)        | 知的認識型 (I1 認識) | 社会的思考型の<br>社会的対象思考型 |
| 言語活動動詞                     | 被相手言語活動型 (AA 認識)         | 言語活動型 (I1 認識) | 社会的言語活動型            |
| 知的態度動詞<br>(思考動詞)<br>(知覚動詞) | 被知的態度型<br>(AA 態度)        | 判断型 (I1 態度)   | 社会的思考型の<br>社会的判断型   |
| 呼称動詞                       | 被呼称型 (AA 態度)             | なし            | 社会的呼称型              |
| 感情=評価的<br>態度動詞             | 被感情=評価的<br>態度型 (AA 態度)   | なし            | 社会的評価型              |
| 評価的処遇動詞                    | 被評価動作の<br>態度型 (AA 態度)    | なし            |                     |
| 表現的<br>態度動詞                | 被表現的<br>態度型 (AA 態度)      | なし            |                     |
| 処遇動詞                       | なし                       | 意義づけ型 (I1 態度) | 社会的意義づけ型            |
| 要求的<br>態度動詞                | 被相手<br>要求的態度型<br>(AA 態度) | 要求型 (I1 態度)   | 社会的関心型<br>社会的約束型    |

例えば, 次の例を見てみよう。「判断」という知的態度を表わす受身文には, 有情有情受身文の〈被知的態度型 (AA 態度)〉と, 非情一項受身文の〈判断型 (I1 態度)〉がある。これらの受身文において, 動作主が不特定一般の人々になったものが〈社会的思考型 (I1 社会)〉の〈社会的判断型〉である。ただし, それぞれのタイプに使われやすい動詞は異なっている。

(39) 和夫は, 校長に無責任と思われた。〈被知的態度型 (AA 態度)〉

(40) その製品は欠陥品と見なされた。〈判断型 (I1 態度)〉

(41) a. 和夫は, (みんなに) 無責任と思われている。〈社会的判断型 (I1 社会)〉

b. 生物は進化すると考えられている。〈社会的判断型 (I1 社会)〉

この〈習慣的社会活動型〉の中には、動作主の具体性が欠けることで、空間的・時間的な具体性が欠け、さらには動詞の語彙的な意味をもかなり漂白化した受身文がある。例えば、「節-ト 言われる／される」という受身文は、伝聞のモダリティー表現に近づいているし、「動詞文-ト 見られる」は推定、「動作性名詞-ガ 求められる／問われる<sup>249)</sup>」などは当為的なモダリティー表現に近づいている。このように、〈習慣的社会活動型〉は、動作主及び時間、場所の具体性に欠け、動詞の語彙的な意味も漂白化しつつあるものもある。

### 1.3.5 超時的事態型への移行

〈超時的事態型〉の代表的なタイプは〈特徴規定型〉である。〈特徴規定型〉は、変化動詞で構成されるが、先行する変化がまったく想定されておらず、よって、動作主の想定も不可能なタイプである。〈超時的事態型〉には、変化動詞の中でも、状態変化動詞と作成動詞が主に要素となる。よって、受身文タイプとしては、〈事態実現型〉の〈変化型 (I1 変化)〉の中でも、〈状態変化型〉と〈結果型〉に相互移行関係を持つ。

- (42) a. この棚は、頑丈に組み立てられている。〈特徴規定型〉  
 b. 棚が次々と組み立てられた。〈状態変化型〉
- (43) a. 「[前略]現代人はみんな要領がいいようにつくられているからね」(冬の旅)〈特徴規定型〉  
 b. 今は身体が作られる時期だから、たくさん食べなさい。〈結果型〉
- (44) 加工された食品、抽象化された概念、煮込み用に作られた鍋 〈特徴規定型〉

さらに、「恵まれた環境」、「洗練されたインテリア」、「満たされない心」などは、ほとんど形容詞として機能していると考えられる。

この〈超時的事態型〉は、事態実現に関わる動作主の具体性も、時間及び場所の具体性も失っている。よって、〈変化型〉から〈超時的事態型〉への移行は、一方向的と考えられる。

なお、〈超時的事態型〉のアスペクトは、「特性」<sup>250)</sup>である。この「特性」は、先行する変化の結果としての「結果状態」のアスペクトから派生したアスペクト的意味であると考えられる。しかし、本研究では、ラレテイル形の結果状態を表わす受身文タイプを、特に受身文タイプとしては立てていないため、ラレル形を基本とする〈変化型〉からダイレクトにこの〈超時的事態型〉へ移行するような形になっている。しかし、実際には、〈変化型〉の各タイプがラレテイル形で結果状態を表す使用から派生していると考えられる。

## 1.4 サブタイプの相互関係

サブタイプの相互関係については、すべてのタイプについて述べることはできないので、ここでは、知覚動詞と言語活動動詞、及び表示・表現動詞による受身文タイプの相互関係の

<sup>249)</sup> 〈社会的関心型〉の受身文。「政府の対応が求められる」など。

<sup>250)</sup> 工藤 1995 は、奥田靖雄の「状態」の概念を捉え違えたのか、この「特性」を表わすアスペクトを「単なる状態」としてしまっている。工藤 1995 は、「単なる状態」の例として、「この道は曲がっている」などを挙げてしまっているが、これは「特性」である。奥田の意図した「単なる状態」とは、志波の理解する限りでは、「いらいらしている」などの心理・生理的状态、及び「光っている、ぴかぴかしている」などの現象の動きである。

みを概観することにする。これら3つの動詞による受身文は、多くの受身文タイプと相互関係にあり、その関係のあり方も複雑である。また、「～と見られる」、「N・ニ N・ガ 見られる」、「～と言われる」、「N・ニ N・ガ 示される」などといった、受身文として特徴的なタイプを発達させているため、ここで取り上げることにした。

### 1.4.1 知覚動詞による受身文の体系

まず、知覚動詞のもっとも基本的なタイプは、具体名詞を対象とする〈知覚認識型 (I1 認識)〉と〈被知覚認識型 (AA 認識)〉である。〈知覚認識型〉は非情一項受身文、〈被知覚認識型〉は有情有情受身文である。

(45) .a. 実験では、様々な色が観察された。〈知覚認識型〉

b. 彼の後姿は見られていた。〈知覚認識型〉

(46) 彼は、駅で良子に見られた。〈被知覚認識型〉

〈知覚認識型 (I1 認識)〉は、一段動詞で、動作主に視点が置かれると、容易に可能用法へ移行する。

(47) 実験では、様々な色が見られた。〈知覚認識型〉ないし〈可能用法〉

また、対象の存在場所を表わすニ格名詞句と共起すると、〈存在確認型 (I1 存在)〉へ移行する。〈存在確認型〉は、具体名詞が主語に立つ具体的存在を表わすタイプと抽象名詞が主語に立つ抽象的存在を表わすタイプがある。具体的存在の受身文には、いまだ感覚器官で捉えるという「知覚」の意味が残っている。

(48) 夜空に星が観察された。〈存在確認型 (具体的存在)〉

(49) 多くの国に共通の現象が見られる。〈存在確認型 (抽象的存在)〉

〈知覚認識型 (I1 認識)〉の対象に抽象名詞が立つと、思考動詞で構成される〈知的認識型 (I1 認識)〉へ移行する。

(50) 私の計画は読まれた。〈知的認識型〉

また、〈知的認識型 (I1 認識)〉は判断内容の節を伴うと〈判断型 (I1 態度)〉へ移行するが、知覚動詞はこの〈判断型 (I1 態度)〉の要素にもなる。

(51) 建物全体が老朽化していると見られた。〈判断型〉

〈判断型 (I1 態度)〉は、動作主が不特定一般の人々になることで〈社会的思考型 (I1 社会)〉の〈社会的判断型〉へ移行する。

(52) 日本の格差はますます拡大すると見られる。〈社会的判断型〉

一方、有情有情受身文の〈被知覚認識型 (AA 認識)〉は、判断内容を表わす句や節を伴うと〈被知的態度型 (AA 態度)〉へ移行する。

(53) わたしは、彼より年上に見られた。〈被知的態度型〉

この判断内容が評価性を帯びると、〈被感情=評価的態度型 (AA 態度)〉へ移行する。



(54) わたしは、彼に優等生に見られた。〈被感情=評価的態度型〉

〈被知的態度型 (AA 態度)〉と〈被感情=評価的態度型 (AA 態度)〉は、ともに動作主が不特定一般の人々になると、それぞれ〈社会的判断型 (I1 社会)〉と〈社会的評価型 (I1 社会)〉へ移行する。

(55) 彼は、次の会長の有力候補と見られている。〈社会的判断型〉

(56) わたしは、いつも優等生に見られる。〈社会的評価型〉

以上、非常に簡単にではあるが、知覚動詞による受身文の相互関係を説明した。知覚動詞が要素となる受身文タイプの相互関係を図にまとめると、次のようになる。図の矢印が両向きであるものは双方向的な移行関係、片方であるものは一方的な移行関係を表わす。

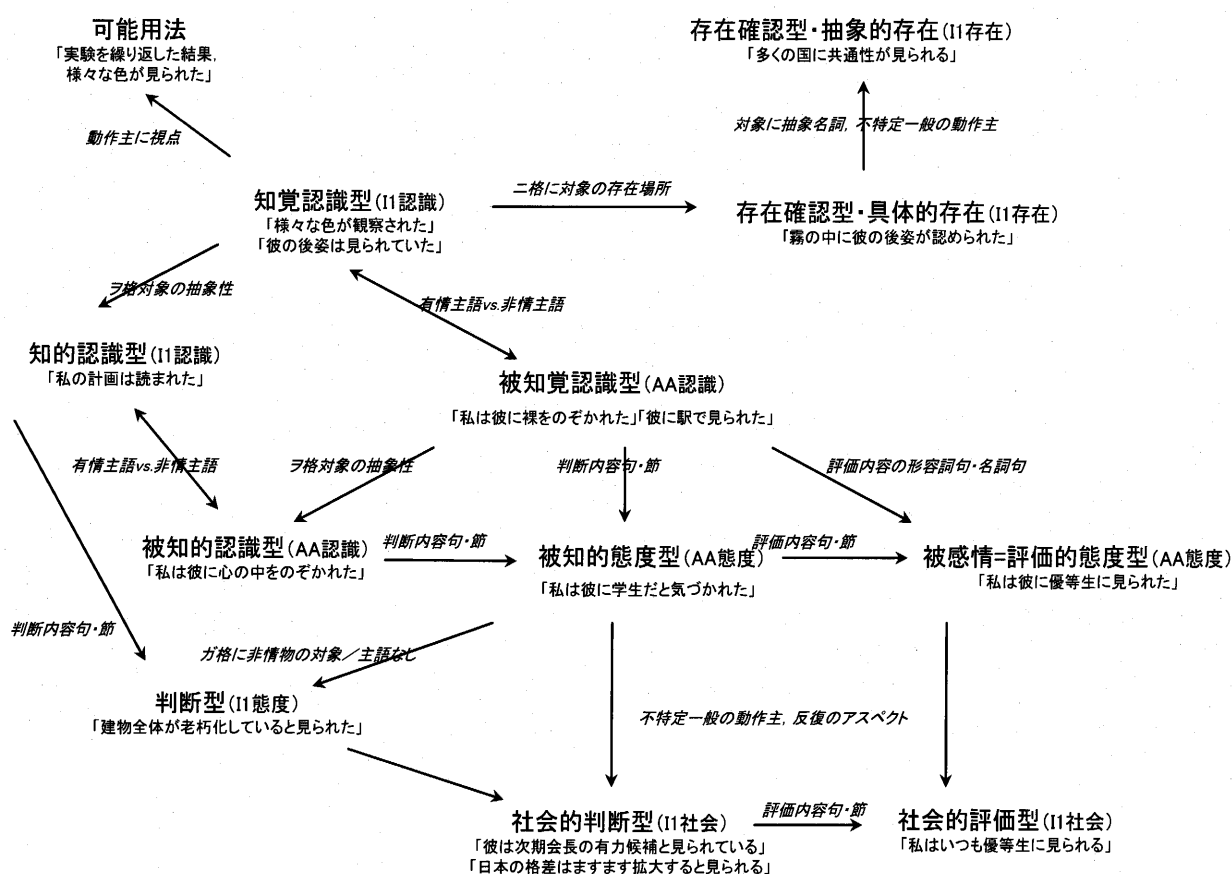


図 16: 知覚動詞による受身文タイプの相互関係

この図を見ると、〈社会的評価型 (I1 社会)〉と〈存在確認型・抽象的存在 (I1 存在)〉は、他のタイプからの派生の行き着くところであることが分かる。すなわち、両タイプは、もっとも抽象度の高いタイプであると考えられる。

### 1.4.2 言語活動動詞による受身文の体系

言語活動動詞による受身文は、非情物の対象が主語に立つか、有情者の発話相手が主語に立つかで大きく対立する。まず、非情物の対象が主語に立つ場合から述べていく。

非情物が対象に立つ、個別の動作主の個別具体的な事態は、〈言語活動型 (I1 認識)〉である。言語活動動詞は、基本的に抽象名詞を対象に取る。

(57) 多くの問題点が指摘された。〈言語活動型〉

この〈言語活動型 (I1 認識)〉は、動作主が不特定一般の人々になることで〈社会的言語活動型 (I1 社会)〉へ移行する。

(58) 経済格差が言われている。〈社会的言語活動型 (社会的対象言語活動型)〉

一方で、知覚動詞や思考動詞同様、言語活動動詞も、「～ト/Adj.:ニ 言われる」などの態度の構造に入ること、動作主の「判断」を含む受身文を構成する。しかし、この判断を含む言語活動の個別の動作主による個別具体的なタイプは存在しない。用例が1例も見つからなかった上、作例でも不自然になるためである。一方、動作主が不特定多数の有情者である〈社会的言語活動型〉には、この判断を含む言語活動の受身文が存在し、頻度も非常に高い。

(59) ??格差が拡大していると(山田教授によって)言われた。(用例なし)

(60) 格差が拡大していると言われている。〈社会的言語活動型 (社会的判断言語活動型)〉

判断を含む〈社会的言語活動型 (I1 社会)〉は、その判断内容が名詞句で表わされる場合、名詞句の実体としての名称が問題になるときは〈社会的呼称型〉へ移行する。

(61) 現在の景気は戦後最悪と言われている。〈社会的言語活動型〉

(62) 現在の景気は平成大恐慌と言われている。〈社会的呼称型〉

次に、有情主語の言語活動動詞による受身文を見ていく。能動文において二格で現れる発話相手が主語に立つ言語活動動詞の受身文は、〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉である。この〈被相手言語活動型〉の発話内容が命令・禁止を表わすと、〈被相手要求的態度型 (AA 態度)〉に限りなく近づく。

(63) 私は母に掃除をしると言われた。〈被相手言語活動型〉

(64) a. 私は母に掃除をしると命令された。〈被相手要求的態度型〉

b. 私は母に掃除を頼まれた。〈被相手要求的態度型〉

また、〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉の発言内容が感情=評価的な意味を帯びると、感情=評価的な態度を言語活動によって表わされることを意味する〈被表現的態度型 (AA 態度)〉に移行する。

(65) 私は和夫に馬鹿だと言われた。〈被表現的態度型 (言語活動動詞)〉

(66) 私は和夫に馬鹿だと {ののしられた/叱られた}。〈被表現的態度型 (表現的態度動詞)〉

さらに、主語に立つ有情者が対応する能動文の二格発話相手ではなく、二格の対象である場合、〈被相手への態度型 (AA 態度)〉へ移行する。

(67) 私は、道で外国人に話しかけられた。〈被相手への態度型〉

また、「訴える」という動詞は、もともと言語活動動詞であるが、二格に社会的機関（裁判所など）をとり、ヲ格に有情者をとって、「社会的機関-ニ 有情者-ヲ 訴える」という構造になるとヲ格の有情者の社会的状態変化を表わす動詞になる。これに対応する受身文は、〈被社会的状態変化型（AA変化）〉である。

(68) 私は、事故の相手に訴えられた。〈被社会的状態変化型〉

さらに、位置変化動詞なども、を格に言語活動を表わす名詞句（話、言葉、噂、相談など）を取ると、言語活動を表わす表現を構成する。しかし、こうした表現は〈位置変化型（I1変化）〉として位置づけた。

(69) 村に噂がばらまかれた。〈位置変化型〉

以上、非常に簡単にではあるが、言語活動動詞による受身文タイプの相互移行関係をまとめた。上に述べたことを図にすると、次のようになる。なお、以下の図では、相互に関係のあるタイプでも、その移行の仕方が当該タイプにおける一部の動詞に限られるなど、関係があまり濃くないタイプは、小さいフォントで示した（ここでは、〈位置変化型〉と〈被社会的状態変化型〉）。また、ヲ格や二格といった用語がカッコ内に示されているものは、対応する能動文におけるヲ格ないし二格という意味であることを示している。

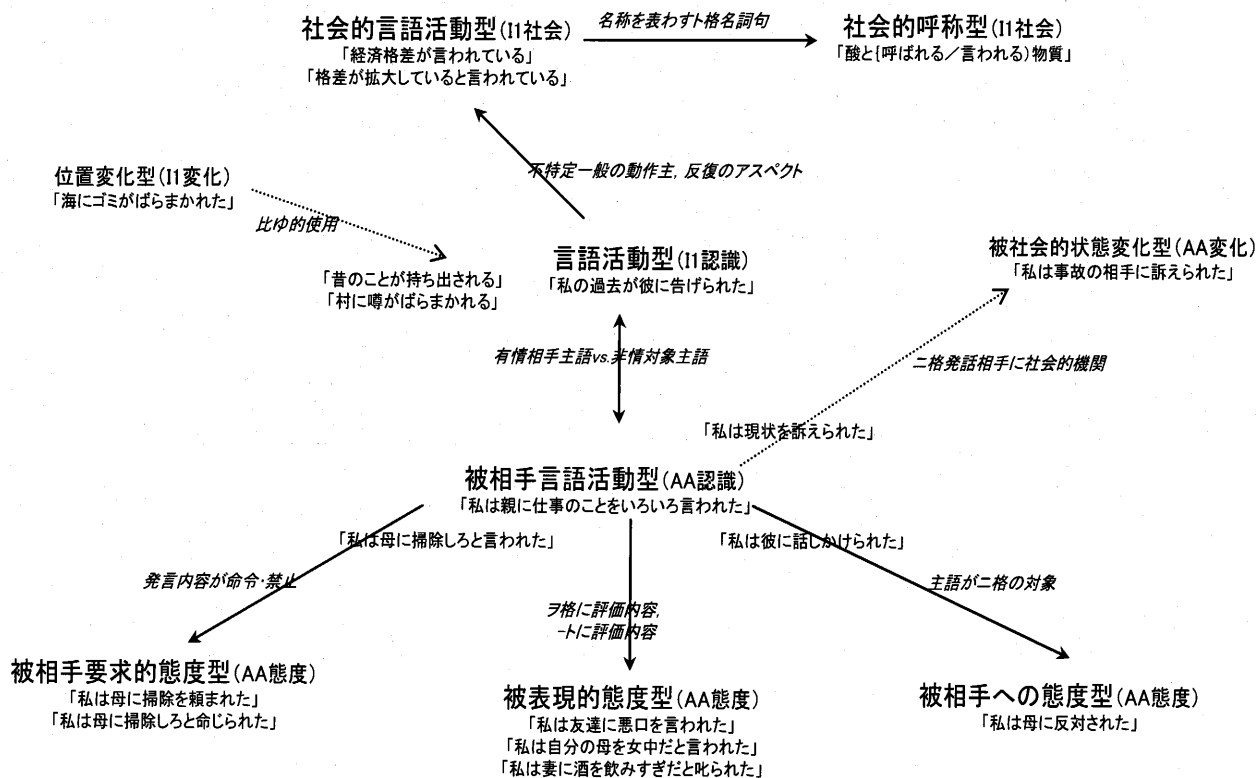


図 17：言語活動動詞による受身文タイプの相互関係

### 1.4.3 表示・表現動詞による受身文の体系

最後に、表示動詞による受身文の体系を概観する。また、表現動詞も、表示動詞にきわめて近い動詞グループであるので、随時、相互の関係を見ていく。表示・表現動詞による受身文タイプは、それほど頻度が高いわけではないが、複雑な相互移行関係を呈しているため、ここで取り上げることにした。

表示動詞による受身文は、対象の出現場所を表す二格と共起する (70)ないし (71)のような受身文が基本的なタイプであると考えられる。このうち、(70)は二格の出現場所が対応する能動文の主語にも立てる、すなわち行為者でもあるという点で特殊である。これらは、非情一項受身文の〈事態実現型〉に〈表示型 (I1 変化)〉の〈表示型〉として位置づけた。

(70) 画面に文字が示された。〈表示型〉

(71) 計画書には具体策が示された。〈表示型〉

この二格の出現場所が、非情物ではなく有情者になり、対象を提示する相手を表わすと、同じ〈表示型 (I1 変化)〉の〈公開型〉へ移行する。

(72) 若手弁護士によって、新たな問題が会員たちに示された。〈公開型〉

この〈公開型〉における、二格の提示相手が主語に立つと、有情有情受身文の〈被相手提示型 (AA 認識)〉へ移行する。

(73) 私は、彼に報告書を見せられた。〈被相手提示型〉

「教えられる、示される」などの動詞は、ヲ格に具体名詞をとれば〈被相手提示型 (AA 認識)〉であるが、ヲ格に抽象名詞をとると〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉へ移行する。

(74) a. 私は彼に道を教えられた。〈被相手提示型〉

b. 私は彼に大切なことを教えられた。〈被相手言語活動型〉

さらに、「指示される」などの動詞は、ヲ格に動作性名詞をとれば、〈被相手要求的態度型 (AA 態度)〉へ移行する。

(75) 私は、彼に掃除を指示された。〈被相手要求的態度型〉

「差し出す」などの動詞は位置変化動詞であるので、次の例は〈被相手動作型 (AA 無変化)〉であるが、意味的には〈被相手提示型 (AA 認識)〉かなり近いだろう。

(76) 私は、彼にマイクを差し出された。〈被相手動作型〉

一方、非情一項受身文の〈表示型 (I1 変化)〉の〈表示型〉は、表現動詞が要素になると、(71)のような、二格名詞句が対象の出現場所ではない受身文になる。つまり、この場合は有情者の動作主が別に存在することになる。このとき、意味・構造的に〈位置変化型 (I1 変化)〉に近づく。

(77) a. 壁に絵が{表示された/描かれた}。〈表示型〉

b. 壁に絵が貼られた。〈位置変化型〉

そして、〈位置変化型 (I1 変化)〉に意味・構造的に近いことから、ラレテイル形では〈存

在様態受身型 (I1 存在) へ移行する。

(78) 壁に絵が {表示されている / 描かれている}。〈存在様態受身型〉

また、「示される」などの動詞は、テンスが超時になると、〈表示型 (I1 変化)〉から〈象徴的關係型 (II 関係)〉へ移行する。

(79) 近代国家のイデオロギーは自由・平等の標語に示される。〈象徴的關係型〉

「示される」などの動詞は、表現手段を表わす句と共起すると、〈表現型 (I1 態度)〉へ移行する。

(80) 路線図では、銀座線は黄色いラインで {示される / 表現される}。〈表現型〉

〈表現型〉の要素である表現動詞は、表現手段をト格で標示することがあるが、このト格が引用節になると、〈社会的言語活動型 (I1 社会)〉へ移行する。

(81) a. 心臓は、こぶし大と表現される。〈表現型〉

b. 心臓は、こぶし大であると表現される。〈社会的言語活動型〉

以上の相互関係を図にまとめると、次のようになる。

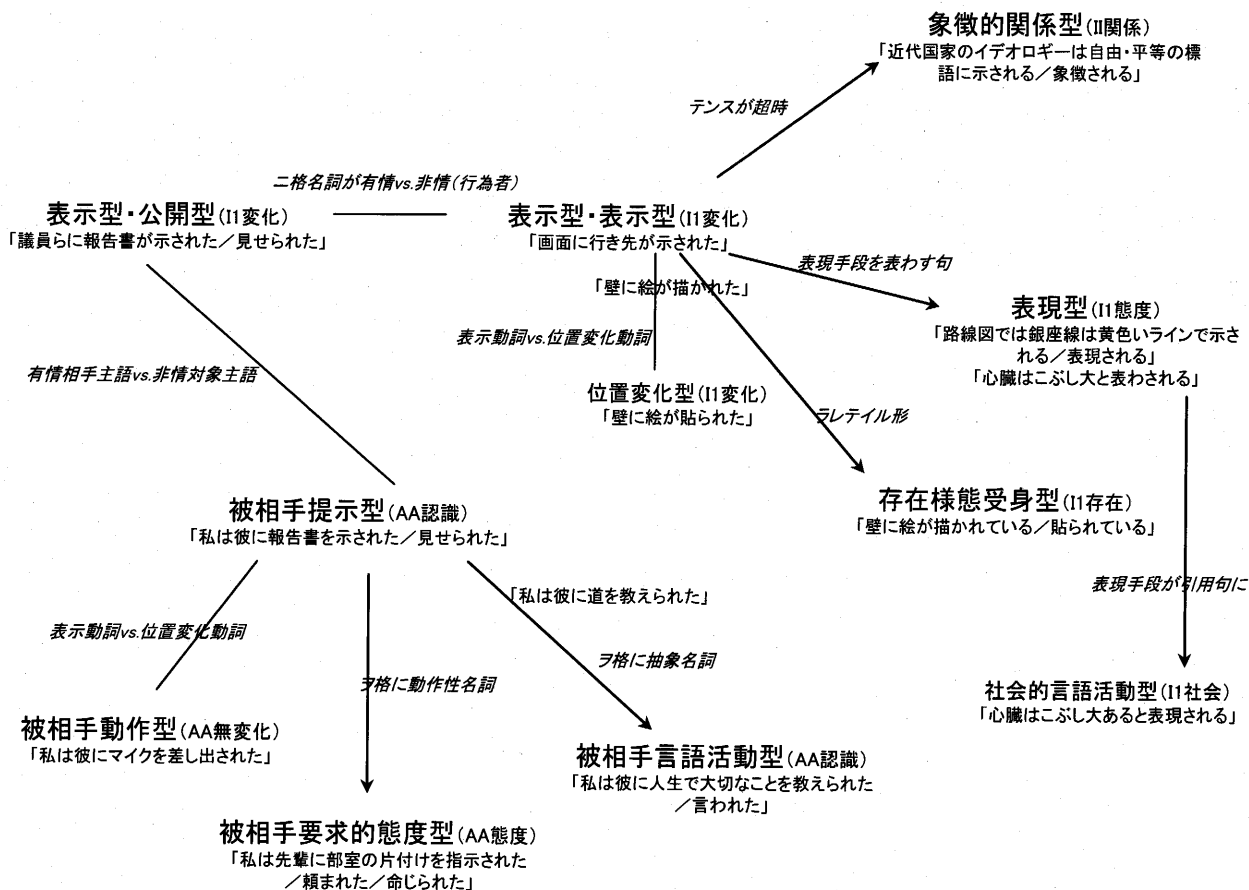


図 18: 表示動詞による受身文の体系

## 2 主語の有情・非情の別による違い

本節では、受身文の主語に有情者が立つタイプと非情物が立つタイプの様々な点での違いについて、具体的な事例を挙げながら述べていく。

まず、主語の有情・非情の別による違いとしてもっとも特徴的なことは、先に 第2章 4 で述べたように、受身文の体系の非対称性が挙げられる。本研究における受身文の15中分類の分類は、有情有情受身文と非情一項受身文で異なる観点から細分類がなされており、結果的に分類が非対称的になっている。しかし、この分類=体系の非対称性は、日本語の有情有情受身文と非情一項受身文の意味・機能の違いを特徴的に反映するものであると考える。

2.2 では、心理動詞による受身文タイプの分布の特徴を見る。心理動詞による受身文は、特に非情物が主語に立つ場合、個別の動作主の個別具体的な事態としての例が極めて少なく、ほとんどが、動作主が不特定一般の人々である〈習慣的社会活動型〉として現れる。

2.3 では、接触動詞による受身文タイプの特徴を見る。接触動詞は、無変化動詞の代表であるが、これによる受身文は、有情主語と非情主語でその頻度がまったく異なる。有情主語の接触動詞による受身文（「私は和夫にたたかれた」）の頻度はきわめて高いのに対し、非情主語の接触動詞による受身文（「ドアがたたかれた」）の頻度はきわめて低い。これは、それぞれの受身文タイプの意味・機能上の特徴によるものと考えられる。

以上が、主語の有情・非情の別による違いの具体的な表れであるが、全体を通して言えることは、日本語の受身文研究において、非情一項受身文の分析が従来あまりなされてこなかったようであるということである。それは、日本語の受身文が、有情主語の受身文において、非常に特徴的なタイプを発達させているからだろう。三上 1953 の《はた迷惑vs.まとも》の対立や、鈴木 1972 の4分類は、すべて有情主語の受身文にこそ有効な分類であった。これに対し、非情物が主語に立つ受身文については、その固有性をめぐる議論<sup>251</sup>はあったものの、現代日本語の非情主語受身文にどのようなタイプがあり特徴があるのか、ということはほとんど研究されてきていない。これは、非情一項受身文がすべて基本的には直接対象が主語に立つ受身文であり、印欧語に見られる受身文との違いがあまり明確ではないためだと考えられる。本研究の分析を通して、現代日本語における非情主語受身文の特徴の一端を明らかにできたのではないかと思う。

### 2.1 受身文の下位分類の非対称性

本研究の受身文タイプの分類は、有情者が主語に立つ受身文と、非情物が主語に立つ受身文とで、異なる観点で下位分類がなされている。これは、本研究の受身文タイプの分類が、データを分析する当初から枠組みとして想定されていたものではないことによる。本研究は、主に動詞の語彙的な意味（カテゴリカルな意味）に注目しながら、受身文の意味・構造的な

<sup>251</sup> 「非情の受身（非情物が主語に立つ受身文）」は日本語に固有の受身文ではないとする定説をめぐる一連の議論。金水 1991, 1993, 志波 2004, 川村(近刊)参照。

タイプとして特徴的なもの、目に付くものを1つ1つタイプとして取り出していく形で進められた。その上で、奥田の連語論の分類から、対応するタイプを補って立てていった結果、細かい受身文タイプがいくつも取り出される結果となった。そのようにして取り出された細かい受身文タイプを、共通の特徴でまとめ上げたところ、最終的に次の図のような分類にたどり着いた。すなわち、ほぼ完全にボトムアップ式の分類である。このために、それぞれが異なる観点で分類された結果となった。

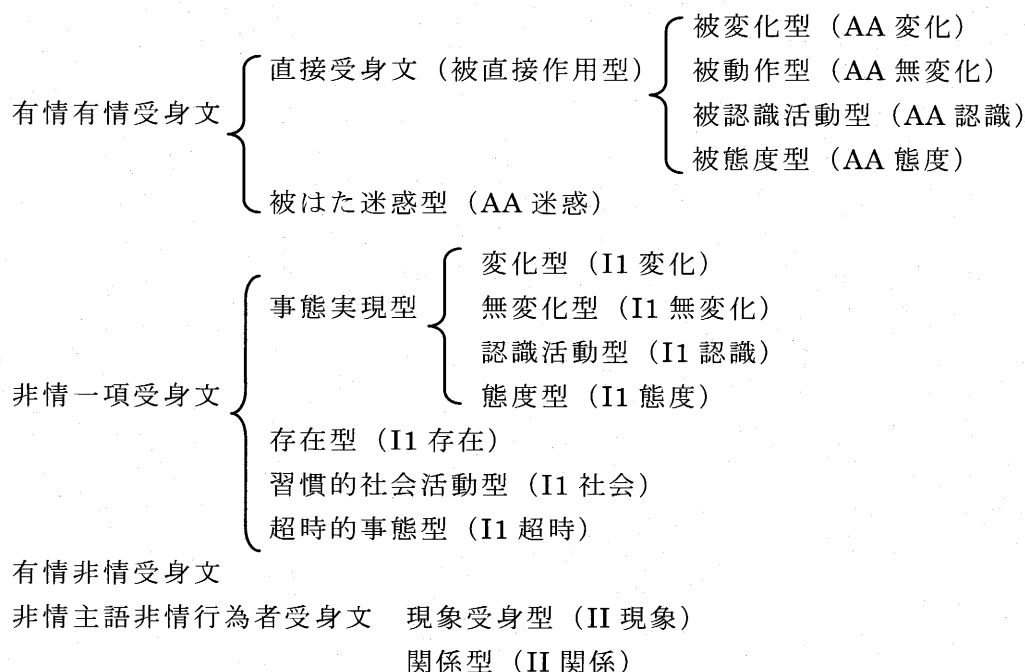


図 19: 受身文の15中分類

有情有情受身文は、対応する能動文の有無という観点から大きく下位分類され、それがさらに動詞の語彙的な意味グループによって細分類されている。一方、非情一項受身文は、動作主とそれに連動したテンス・アスペクト的な条件から大きく下位分類され、それがさらに動詞の語彙的な意味グループによって細分類されている。このように、結果的に異なる観点からの分類に落ち着いたこと、つまり分類の非対称性には、それぞれの受身文の意味・機能と発展の歴史が密接に関係しているものと考えられる。

有情主語受身文の代表的タイプである有情有情受身文は、有情者が相手=動作主から何らかの動作やそれに伴う影響を身に受けたことを表わし、話し手はこの被動者（受影者）である有情者を主語にして、この者の立場に立って、事態を述べるのである。別の言い方をすれば、被動者に視点や共感を置いて、ときには被動者と感情を共有する形で、事態を述べる。有情有情受身文は、このような「有情者が動作を身に受ける」という意味と、「被動者の立場・視点から述べる」という機能を第一義的に持っていたために、直接的な動作にとどまらず、広く影響を身に受ける有情者の立場から事態を述べる受身文をも発展させていったのだと考えられる。すなわち、直接目的語としての被動者に限らず、対象の向かう相手として間接的に動作を身に受ける有情者、対象の所有者として間接的に動作を身に受ける有情者、さらには、動作はまったく受けず、ただその事態が生じたことによる影響のみを身に受ける有情者

にまで、主語に立つ有情者の範囲を拡大していったのだろう<sup>252</sup>。

これに対し、非情主語一項受身文は、動作主の存在を含意しつつも、動作主の人間としての意志や感情といった人格性には関心がなく、当該事態を引き起こした動作主の責任性も問題にしていない。非情一項受身文のこうした機能を「動作主背景化」と呼んでいる。非情一項受身文は、この「動作主背景化」という機能を、第一義的機能として持っていたために、動作主が不特定多数の人々である場合や不明である場合に積極的に用いられた。その結果、動作主がまったく想定できず、そのため、能動文で述べるできない受身文までを発達させたものと考えられる。そして、こうした動作主の具体性とテンス・アスペクトの具体的時間性とは密接に連動している。このため、非情主語一項受身文は、テンス・アスペクト的に、動詞文らしくないタイプを発達させているのである。また、動作主及びテンス・アスペクトが具体性を失うのと平行して、動詞そのものの語彙的な意味の具体性をも失いつつある受身文タイプも存在する<sup>253</sup>。

なお、有情有情受身文の「身に受ける」という受影の意味は、動作主を自分（受影者）に行為をもたらした相手としてその責任を追及するというという視点者の意識が関与していると考えられるため（Tsuboi 2000）、有情有情受身文では動作主が構文上明らかであることの方が多（志波 2006 参照）。よって、有情有情受身文は、「動作主を背景化させる」という動機で積極的に用いられるタイプではないと考える。

このように、受身文の要素として、動詞の語彙的な意味や名詞の語彙的な意味、テンス・アスペクトといった、さまざまな特徴に着目し、タイプを取り出していくというボトムアップ式のやり方によって、トップダウン式の方法論からは得られないであろう分類に落ち着いたわけである。しかしながら、この分類の非対称性こそが、日本語の受身文の体系を特徴的に捉えていると考える。

ただし、基本的にはボトムアップ式だが、方法論としては、ボトムアップとトップダウンは双方向的であることが望ましいだろう。本研究の分析においても、受身文の主語の有情・非情の別が意味・機能の違いをもたらす根本的要素であるという仮説が想定されていたことは確かである。

## 2.2 非情主語受身文における心理動詞の分布の偏り

非情物が主語に立つ受身文は、通常、動作主の人格性（意図や責任）は不問に付され、動作主は文中に現れずに背景化される。しかし、動作動詞の場合、この背景化された動作主はたとえ不特定であっても実際には何らかの個人であって、事態は個別一回的なものとして述べられることが多い（「会議が行われる」「文書が届けられる」など）。一方、認識動詞による非情一項受身文の場合、背景化された動作主は、不特定多数の一般の人々であることが圧倒的に多く、これに連動して事態は反復的なアスペクトで述べられることが多い。すなわち、本研究のタイプで言うなら、非情物が主語に立つ場合、動作動詞は通常〈事態実現型〉で述べられるのに対し、心理動詞は〈習慣的社会活動型〉として述べられることが多いのである。

<sup>252</sup> 自動詞が要素となるような典型的な「はた迷惑の受身（間接受身）」は、近代以降に増えた類型で、日本語の受身文は基本的に対象への直接的な働きかけを表わすものが典型であったとされている（堀口 1982 参照）。

<sup>253</sup> 「大統領は来週にも来日すると見られる」（社会的思考型）、「肥満は現代病と言われている」（社会的言語活動型）、「本部の対応が求められる」（社会的関心型）など、かなり動詞の意味が具体性を失っていて、それぞれ、推定、伝聞、当為のモダリティ表現に近づいている。



非情主語でかつ個人の動作主であっても、動作主の存在が背景化されていれば、受身文として成立してもよさそうである。しかしながら、通常の動作動詞による非情主語受身文と異なり、心理動詞では、個別動作主の具体的な事態としての受身文が極めて少なかった。

(82) a. ?新しい情報が(研究者によって)知られた。(少数<sup>254</sup>: 知的認識型 (I1 認識))

b. エジプトの歴史は広く知られている。(多数: 社会的思考型 (I1 社会))

(83) a. 人間の性格は環境に左右されると考えられた。(少数<sup>255</sup>: 判断型 (I1 態度))

b. 人間の性格は環境に左右されると考えられている。(多数: 社会的思考型 (I1 社会))

また、呼称を表わす「N-ト 呼ばれる」というタイプは、主語が有情者でも個別の動作主による具体的な事態の例は少なく<sup>256</sup>、非情物にいたっては用例が1例もなかった。トで導かれる言語活動の内容(判断)を表わす句/節を伴う言語活動動詞も、非情主語受身文では、個別の動作主による一回的な事態は、すべてのテキストを通じて1例も用例がなかった。

(84) a. ??そのビルは(市長によって)ランドマークと呼ばれた。(用例なし)

b. そのビルはランドマークと呼ばれている。(多数: 社会的呼称型 (I1 社会))

(85) a. ??子供の非行は(教師によって)すべて親の責任だと言われた。<sup>257</sup> (用例なし)

b. 子供の非行はすべて親の責任だと言われている。(多数: 社会的言語活動型 (I1 社会))

さらに、動作主の評価的な態度を含む心理動詞でも、通常非情物が主語に立つ個別一回的な受身文は見つからなかった。評価的な態度を含む心理動詞は、能動文では具体名詞から抽象名詞まであらゆる非情物を対象にとるが、非情物対象を主語にした個別の動作主の受身文は非常に成立しにくい。

(86) a. 彼は、王室の衰退を悲しんだ/哀れんだ/嘆いた。

b. ??王室の衰退が(彼によって)悲しまれた/嘆かれた。(用例なし)

(87) a. 博士は平和を愛した/エイズを恐れた/早朝の風呂を楽しんだ。

b. ??平和が(博士によって)愛された/エイズが恐れられた/早朝の風呂が楽しまれた。(用例なし)

ただし、評価的な態度を含む心理動詞でも、有情者の所有物である非情物が主語に立つ例は、個別動作主の受身文にも見つかった。こうした非情主語の受身文は、すべて有情有情受身文に位置づけた。

(88) 僕の誠実さが疑われるということは、端的に言って、僕自身が否定されるということだな。

そうでしょう。(青春の蹉跌)

<sup>254</sup> 「知られる」による〈知的認識型〉は統計を取ったデータには次の1例のみ。

・男の上着のポケットから名刺入が出た。身もとはそれによって知られた。(点と線. 地)

<sup>255</sup> 「考えられる」による〈判断型〉は統計を取ったデータには用例が見つからなかった。統計を取ったデータ以外のデータには、次のような例がある。

・その結果、不慣れでポインターと目標の誤差が大きいうちは、小脳の外側にあたる広い領域で血流が盛んだった。上達して誤差が縮まると、領域内の血流量は、誤差の縮小に正確に比例して低下した。この領域は、大脳が目で確認した誤差の情報を受け取る役をしていると考えられた。(毎日1月24日)

<sup>256</sup> なお、「先生に呼ばれて研究室に行った」における「呼ばれる」は、対象をある動作へと促すことを表わす催促動詞の例で、〈被催促型〉である。

<sup>257</sup> ただし、この文に対応する能動文は、「教師は子供の非行をすべて親の責任だと言った」となるが、「N-ヲ ト 言う」という能動文自体、現在ではあまり用いられないだろう。一方で、〈社会的言語活動型〉である、「子供の非行はすべて親の責任だと言われている」

(89) 彼がなにかにつけ榆病院の行事を手伝ったのは、前職員ということもあったが、こまめによく気がつくその実直さと、常ににこにここと笑顔を絶やさないその性格と、なによりいざとなると大男そこのけの朗々たる声をはりあげることのできるその喉と肺活量とが尊ばれたからである。(榆家.地)

(90) 将来、国境を越えた取引や決済が単一の電子マネーで行われるようになると主権国家の通貨発行権が脅かされる。(毎日)

以下では、こうした心理動詞による非情主語の受身文の特徴について明らかになったことをまとめて述べていく。なお、ここで詳細に触れるのは頻度の高い心理動詞のみで、あまり頻度の高くない心理動詞については、その他として特徴的なタイプのみ言及する。本項で詳しく述べる、頻度の高い心理動詞とは、次の表に載せた 8 種類の動詞である。後の説明で指示しやすいように、表の各セルに番号を振った。

表 41：心理動詞が要素となる受身文タイプ

| 心理動詞 \ 受身文タイプ        | 個別具体的事態  | 習慣的事態                 |
|----------------------|----------|-----------------------|
|                      | 事態実現型    | 習慣的社会活動型              |
| 知覚動詞                 | 1 知覚認識型  | 2 なし                  |
| 思考動詞                 | 3 知的認識型  | 4 社会的思考型の<br>社会的対象思考型 |
| 言語活動動詞               | 5 言語活動型  | 6 社会的言語活動型            |
| 発見動詞 (知覚動詞)          | 7 発見的認識型 | 8 なし (存在確認型)          |
| 判断動詞<br>(思考動詞, 知覚動詞) | 9 判断型    | 10 社会的思考型の<br>社会的判断型  |
| 呼称動詞                 | 11 なし    | 12 社会的呼称型             |
| 感情=評価的態度動詞           | 13 なし    | 14 社会的評価型             |
| 要求的態度動詞              | 15 要求型   | 16 社会的關心型<br>社会的約束型   |

それぞれの動詞には、〈事態実現型〉と〈習慣的社会活動型〉の両方のタイプがあるものと、片方が欠けているものがある。ここで、少し説明を加えておく。まず、セル 2 の知覚動詞の〈習慣的社会活動型〉であるが、これは用例の頻度が非常に低かったため、タイプとしては立たなかった。セル 8 の発見動詞の〈習慣的社会活動型〉も、頻度が低いためタイプを取り出していない。ただし、動作主が不特定一般の人々である発見動詞の受身文には、「多くの国に共通の現象が見出される」などの受身文がある。これは、存在の意味と構造を持つことを優先させ、〈存在確認型〉として〈存在型〉のサブタイプに位置づけた。次に、呼称動詞による〈事態実現型〉はタイプが存在しないが、これは用例が 1 例も見つからなかったためである。作例で例文を作ってもあまり自然な受身文にはならない(「そのビルは(市長によって)ランドマークと呼ばれた」)。最後に、感情=評価的態度動詞の〈事態実現型〉であるが、これは用例が少なく、さらに見つかった非情主語の例はすべて有情者の所有物である非情物であったので、これはすべて有情有情受身文の〈被感情=評価的態度型〉に位置づけた。

## 2.2.1 知覚動詞・発見動詞

知覚動詞は、人間の感覚器官で捉えられる現象を対象とするのが基本で、名詞のタイプで言えば、知覚の対象になるのは主に具体名詞である(奥田 1968-72:93)。一方で、「見られる」などの知覚の様態を含まない一般的な知覚を表わす動詞は、「態度の構造<sup>258</sup>」や「発見の構造<sup>259</sup>」の要素となることで、抽象名詞をも対象として取る多義語になっている。

具体名詞が対象となる知覚動詞による非情主語受身文には、〈知覚認識型 (I1 認識)〉(セル1)がある。それぞれ、次のような受身文である。

(91) 細胞分裂が見られた／観察された。〈知覚認識型 (I1 認識)〉

非情物がガ格に立つ知覚動詞のラレル文は、一段活用動詞の場合、自発ないし可能用法との間で意味の曖昧性が生じる。

〈知覚認識型 (I1 認識)〉は、個人の動作主による個別具体的な事態であるが、知覚動詞ではこうした受身文に対応する〈習慣的社会活動型〉は、タイプとしては立たなかった(セル2)。不特定一般の動作主の習慣的な事態である受身文は見つかったが、頻度が極めて低いため、こうした受身文は個別具体的な事態とともに同一のタイプに位置づけた。

(92) 実際、地上波テレビやBSアナログ放送、CSデジタル放送もケーブルテレビを通じて見られている割合が多い。12月に始まるBSデジタル放送も半分近くはケーブルテレビで見られるとの見方もある。(毎日)〈知覚認識型〉

一方で、知覚動詞(主に「見られる」)は、しばしば「N/節-ト V-ラレル」という構造で、動作主の「判断」という態度を表わす受身文の要素となる。それも、個別具体的な事態ではなく、動作主が不特定一般の人々である<sup>260</sup>〈社会的判断型 (I1 社会)〉(セル10)の要素となる。

(93) 大統領は明日にも帰国すると見られる。〈社会的判断型 (I1 社会)〉

このような、判断内容が個別一回的な事態(動詞文)であるものは、思考動詞による〈社会的判断型〉よりも、知覚動詞(主に「見られる」)で述べられることが多い。また、この「動詞文-ト 見られる」は、事実報告などの内容が多い新聞テキストに頻繁に現れ、他のテキストにはほとんど現われない。さらに、文末で用いられることが多く、「見られる」の語彙的な意味もかなり漂白化していて、これは、推定の「ヨウダ」のようなモダリディー表現に近づいている<sup>261</sup>。

なお、有情者が主語に立つ受身文では、「動詞節-ト 見られる」という例はなく、すべて「名詞(節)-ト 見られる」という構造になっている。

(94) わたしは彼の友達と見られるのは嫌だ。〈社会的判断型 (I1 社会)〉

258 「N-ヲ N-ト 認識 V-スル」という構造(奥田 1968-72:119)。「N-ト」は判断内容を表わし、「N-トシテ/ニ/ノヨウニ」といったバリエーションを持つ。

259 「N-ニ N-ヲ 発見 V-スル」という構造(奥田 1968-72:106)。

260 このとき、ラレル形では動作主が話し手を含めた不特定一般の人々であり、ラレテイル形では話し手を除いた不特定一般の人々になる。

261 工藤 1989 では、「推定」の2次的なモダリティー形式に「～と見える」が挙げられている。

有情者が主語に立つ「有情者・ガ 名詞(節)-ト 見られる」という受身文の場合は、用いられる外部構造が主観的感情を表わす表現（「V-タクナイ」「V-ノハ嫌だ」「V-タラ 困る」など）が多い。つまり、受身文としての意味・機能が異なっていると考えられるが、本研究ではいずれも同じ〈社会的判断型（I1 社会）〉に分類されている。今後、分類を見直す余地がある。

「判断」を表わす非情主語受身文の個別具体的な事態は、〈判断型（I1 態度）〉（セル9）である。この〈判断型〉にも知覚動詞は現れうるが、文末では自発ないし可能と解釈されがちになるだろう。

(95) 問題はないと見られた部品が故障した。〈判断型〉

さらに、知覚動詞は、存在を表わす受身文のうちの〈存在確認型（I1 存在）〉（セル8）の要素となることも多い。これは、「Np-ニ Nq-ガ 見ラレル」という、「発見の構造」を含む存在文の形式を持つタイプで、発見動詞もこの構造の要素になる。「発見の構造」の要素となれば、知覚動詞は抽象名詞の対象とも自由に組み合わせるため、〈存在確認型〉の主語には具体名詞も抽象名詞も立つ。しかし、統計を取ったデータでは、抽象名詞が主語に立つ例が非常に多い。

(96) 雲の間に赤いものが認められた。〈存在確認型（I1 存在）〉

(97) 多くの国に共通の現象が見られる／見出される。〈存在確認型（I1 存在）〉

以上、まとめると、知覚動詞は、「具体 N-ガ 知覚 V-ラレル」というタイプ（知覚認識型）では、対応する習慣的社会活動型を持たない。一方で、「Np-ハ Nq-ト 見ラレル」という構造の〈社会的判断型（I1 社会）〉と、「Np-ニ Nq-ガ 見ラレル」という構造の〈存在確認型（I1 存在）〉の要素になり、これらのタイプの頻度はかなり高い。〈社会的判断型〉も〈存在確認型〉も、動作主は不特定一般の人々で、アスペクトが反復・習慣である受身文タイプである。

## 2.2.2 思考動詞・判断動詞

知覚動詞と対照的に、知的な認識活動を表わす思考動詞の対象になるのは主に抽象名詞である。抽象名詞が対象となる思考動詞による非情主語受身文は、個人の動作主による個別具体的な事態では、〈知的認識型（I1 認識）〉（セル3）がある。しかし、このタイプも頻度は高くない。

(98) 日本人の精神文化が（研究者によって）考察された。〈知的認識型（I1 認識）〉

また、〈知的認識型（I1 認識）〉と構造的に直接対応する習慣的事態である〈社会的対象思考型（I1 社会）〉（セル4）の頻度もそれほど高くない。

(99) 教育問題が考察されている。〈社会的対象思考型（I1 社会）〉

一方で、思考動詞は、知覚動詞同様、「態度の構造」に入って、頻繁に「判断」を表わす受身文の要素となる。個人の動作主の個別具体的な事態を表わすのが〈判断型（I1 態度）〉（セル9）であり、不特定多数の動作主の反復・習慣的事態を表わすのが〈社会的判断型（I1

社会)) (セル 10) である。個別具体的な事態である〈判断型〉の頻度はそれほど高くないが、〈社会的判断型〉の頻度は非常に高い。

(100)?脳の信号活動は(彼によって)電気現象と思われた/見なされた。〈判断型 (I1 態度)〉

(101)a. 脳の信号活動は電気現象と見なされている。〈社会的判断型 (I1 社会)〉

b. 近年, 日本では格差が拡大したと思われている。〈社会的判断型 (I1 社会)〉

こうした判断の構造を含むタイプは、判断動詞、思考動詞、及び先の知覚動詞で構成されるが、判断動詞の種類は少なく、「見なされる、判断される」のみである。「判断」を表わす受身文は、主に思考動詞と知覚動詞で構成される。さらには、思考動詞の中には、「判断」を表わす受身文には積極的に用いられるにも関わらず、単なる知的な認識活動を表わす受身文の要素にはなりにくい動詞がある。

知的な認識活動を表わす受身文の要素になりにくい思考動詞とは、「思われる」「考えられる」といったごく一般的な思考を表わす動詞である<sup>262</sup>。能動文とそれに対応する受身文を挙げる。

(102)a. 和夫は彼女の強さを思った。

c. ??彼女の強さが思われた。

(103)a. 良子は彼の精神状態を考えた。

c. ??彼の精神状態が考えられた。

特に、「思う」という動詞は、「N-ヲ 思う」という連語の使用自体が古めかしくなっているようである。「経済格差を思う」「地下鉄サリン事件を思う」などの表現は、成立するが、単なる思考活動というよりも感傷的なニュアンスが伴う。このため、「思われる」という動詞は、不特定多数の一般の人々が動作主である〈社会的対象思考型 (I1 社会)〉(セル 4)の要素にもなりにくいようである。

(104)??近年, 経済格差(の深刻化)が思われている。

(105)??地下鉄サリン事件が(人々によって)思われている。

一方で、(101)のように、「思われる」や「考えられる」は「判断」を表わす受身文には積極的に用いられる。このように、一般的な思考動詞である「思われる」や「考えられる」の分布の偏りを指摘しておく。

思考動詞は、「感情=評価」を表わす受身文の要素となることがある。奥田 1968-72 は、「思う」という動詞が、感情をしめす形容詞を伴って、感情の質を規定することで、〈感情的な態度のむすびつき〉の要素となることを述べている(同:117)。この「感情形容詞+思う」という組み合わせは、受身文でも頻繁に用いられる。ただし、ここでも動作主が個人である受身文の頻度はあまり高くなく(セル 13)、動作主が不特定一般の人である〈社会的評価型 (I1 社会)〉(セル 14)の頻度が高い。

<sup>262</sup> これは、主語が有情者でも言えることである。

・ 和夫は彼女の強さを思った。vs. ??\*彼女は(自分の)強さを和夫に思われた。(cf.誤解された)  
また、「考えられる」が有情者が対象である〈被知的認識型(AA 認識)〉の要素となった受身文(「?\*わたしは彼に考えられた」も成立しにくい。このほか、「振り返られる」などもこうした受身文の要素になりにくい。

(106)日本では、小さいものの方が好ましく思われてきた。〈社会的評価型 (I1 社会)〉

なお、思考動詞も知覚動詞同様、ガ格に非情物が立つと、自発ないし可能用法との間で意味の曖昧性が生じる。

(107)その問題には、いくつかの解決策が考えられる。〈可能用法〉

以上、まとめると、思考動詞は〈社会的判断型 (I1 社会)〉の要素として用いられることがもっとも多く、〈社会的判断型〉の頻度は高いのに対し、個人の動作主の個別具体的な事態を表わすタイプの頻度は(有情・非情いずれの主語でも)あまり高くない。特に「思われる」や「考えられる」といった一般的な思考活動を表わす動詞は、通常の知的な認識活動を表わす受身文の要素となりにくい。一方で、「思われる」は感情=評価的な形容詞と組み合わせさせて〈社会的評価型〉の要素になることも多い<sup>263</sup>。

### 2.2.3 言語活動動詞

言語活動動詞は、抽象名詞を対象に取り、-トで導かれる引用節とも共起する点で思考動詞に近いが、発話相手を表わすニ格名詞句を取る点で構造的に異なっている。この、発話相手である有情者が主語に立った受身文(〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉)が、会話文テキストの中では際立って頻度が高い。次の例は、〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉である。

(108)わたしは彼にもう会いたくないと言われた。〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉

これに対し、対象である非情物が主語に立った受身文の場合は、個人の動作主か、不特定一般の動作主かで、頻度が大きく異なる。ここでも、動作主が個人の有情者である〈言語活動型 (I1 認識)〉(セル5)の頻度は高くない。

(109)事件のいきさつが淡々と述べられた。〈言語活動型〉

一方の〈社会的言語活動型 (I1 社会)〉(セル6)の頻度は非常に高い。〈社会的言語活動型〉には、〈社会的対象言語活動型〉と〈社会的判断言語活動型〉の2つのサブタイプがある。〈社会的対象言語活動型〉とは、言語活動の対象が主語に立った受身文で、〈社会的判断言語活動型〉とは、主に-トで導かれる判断内容を表わす句や節を伴う受身文である。

(110)a. 近年、経済格差が盛んに言われている／議論されている。〈社会的対象言語活動型〉

b. 放任主義は問題であることが言われている。〈社会的対象言語活動型〉

(111)a. その病は不治と言われている／される。〈社会的判断言語活動型〉

b. 近年、日本では格差が拡大したと言われている。〈社会的判断言語活動型〉

ここで注目すべきは、〈社会的判断言語活動型〉に対応する個別具体的な事態の受身文の例が一例も見つからないことである。個別具体的な判断の言語活動とは、例えば、「その病

<sup>263</sup> なお、思考動詞についても1点指摘しておく、具体名詞である有情者が対象である場合、能動文では「人-のことを心配する／思う」のように、抽象化の手続きをふまなければならない(奥田1968-72:pp98-99)。この法則は、モノが主語に立つ場合は、基本的に、受身文になっても破られるものではないと考えるが、人が主語に立つ〈被知的認識型 (AA 認識)〉では、有情者がそのままの形で主語に立つ。逆に、「わたしのことが心配された」という受身文は自然ではない。

は（山田医師によって）不治と言われた」のような受身文であるが、こうした例は見つからなかった。「断定される」のような動詞であれば、個別一回的な事態として成立しないわけではないが、〈社会的判断言語活動型〉の頻度が高いのに比べれば、まれである。

なお、先に「動詞文-ト 見られる。」が推定の「ヨウダ」に近づいていると述べたが、〈社会的判断言語活動型〉の「節-と言われる／される」も伝聞の「ソウダ」のモダリティ表現に近づいているだろう（早津 2000）。

まとめると、言語活動動詞の場合、発話相手の有情者が主語に立った〈被相手言語活動型〉の会話文における頻度はきわめて高い。一方、非情物の対象が主語に立つ場合、個別具体的な事態である〈言語活動型〉の頻度が高くないのに対し、動作主が不特定一般の人々である〈社会的言語活動型〉の頻度は高かった。特に、「判断」を含む言語活動では、非情主語受身文の個別具体的な事態の例が1例も見つからなかったのに対し、習慣的な社会活動の受身文の頻度は高かった。

#### 2.2.4 呼称動詞

呼称動詞で構成される非情主語の受身文には、個別具体的なタイプがなく、動作主が不特定一般の人々である〈社会的呼称型 (I1 社会)〉（セル 12）のみがある。統計を取ったデータには非情主語の個別一回的な受身文は存在しなかった。一方で、〈社会的呼称型〉の頻度は非常に高い。奥田 1968-72 では、呼称動詞は〈表現的な態度のむすびつき〉の連語の要素として簡単に扱われているのみであるが、〈社会的呼称型〉の頻度が非常に高いので、これを1つの受身文タイプとして立てた。

(112)a. ??その建物は（市長によって）ランドマークタワーと呼ばれた。（用例なし）

(113)そのビルはランドマークタワーと呼ばれている。〈社会的呼称型〉

この〈社会的呼称型〉は、主語が有情者でも非情物でも受身文の表わす意味がそれほど変わらないのも特徴である。

(114)彼女は姉御と呼ばれている。〈社会的呼称型（有情主語）〉

(115)その信号はインパルスとよばれている。〈社会的呼称型（非情主語）〉

また、特に非情物が対象の場合は、文末よりも「A-ト 呼ばれる B」のように、連体修飾で用いられることが多く、これは「A-トイウ B」に置き換えられることもあり、典型的な動詞文の性格を失いつつあるようである。

以上、まとめると、呼称動詞は生産性が低く（動詞の種類が少なく）、個人の動作主の個別具体的な事態としての受身文は頻度も非常に低いが、動作主が不特定一般の人々である習慣的社会活動では、頻度が非常に高くなる。そして、おそらく、受身文における〈社会的呼称型〉は、能動文における呼称動詞の使用に比べ、かなり高い頻度を示しているのではないかと考えられる。なお、呼称動詞の受身文で、非情物が対象の場合は、「A-ト 呼ばれる B」のように、連体修飾の外部構造で用いられることが多い。

## 2.2.5 感情=評価的態度動詞

評価的態度動詞で構成される非情主語の受身文は、動作主が個人である個別具体的なタイプは、非情一項受身文にはサブタイプが立たなかった。これは、通常非情物が主語に立つ例が存在せず、わずかに得られた数例はすべて有情者の所有物である非情物が主語に立つ例であったため、これらはすべて〈被感情=評価的態度型 (AA 態度)〉に位置づけたためである。一方で、動作主が不特定一般の人々である〈社会的評価型 (I1 社会)〉(セル 14)は高い頻度を見せている。感情=評価的態度動詞の場合、作例でも、個別の動作主の一回的な事態では、自然な例が作りにくい。

(116)a. 和夫は汚い仕事を嫌った。

b. ???汚い仕事は、(和夫によって)嫌われた。

c. 汚い仕事は、若者に嫌われる。〈社会的評価型 (I1 社会)〉

(117)a. 彼は、王室の衰退を悲しんだ／哀れんだ／嘆いた。

b. ??王室の衰退が(彼によって)悲しまれた／嘆かれた。

c. 王室の衰退が悲しまれている／嘆かれている。〈社会的評価型 (I1 社会)〉

(118)a. 博士はエイズを恐れた／早朝の風呂を楽しんだ。

b. ??エイズが(博士によって)恐れられた／早朝の風呂が楽しまれた。

c. エイズが恐れられている／当時は早朝の風呂が楽しまれた。〈社会的評価型 (I1 社会)〉

しかしながら、動作主が不特定一般の人々であっても、感情的な意味の強い動詞では、抽象名詞が主語に立つ受身文が成立しにくい。態度動詞である感情評価動詞の場合、能動文では対象にモノ(具体名詞)もコト(抽象名詞)も自由に取りうるのだが、受身文の場合、感情的な意味の強い動詞では、抽象名詞が主語に立ちにくいのである。次のように、評価的な意味の強い動詞(119)と比べてみると明らかである。

(119)a. {自由／平和／古い伝統}を尊ぶ。

b. {自由／平和／古い伝統}が尊ばれる。(軽視される, 重視される, 否定される)

(120)a. {自由／平和／古い伝統}を愛する。

b. ??{自由／平和／古い伝統}が愛される。(嫌われる, 憎まれる)

一方、有情者が主語に立つ感情=評価的態度動詞による受身文の頻度は非常に高い。本研究では、個別動作主による受身文は、より心理的な評価を表す〈被感情=評価的態度型 (AA 態度)〉と、より動作的な評価の態度を表す〈被評価動作的態度型 (AA 態度)〉と、言語活動による評価的態度を表す〈被表現的態度型 (AA 態度)〉を別々のタイプとして立てたが、この3タイプの用例をあわせて〈被評価的態度型〉とすることも可能だろう。その場合、会話文テキストにおいては、頻度がもっとも高いタイプとなる。

まとめると、感情=評価的態度動詞でも、非情主語受身文の個別具体的な事態は成立しにくい。動作主が不特定一般の人々である反復的事態の頻度は高い。ただし、動作主が不特定一般の人々であっても、感情的な意味の強い動詞では、主語に抽象名詞が立ちにくい傾向がある。一方、同じ感情=評価的態度動詞でも有情主語受身文の場合は、個別具体的な事態を表わすタイプの(会話文テキストにおける)頻度は非常に高い。



## 2.2.6 要求的態度動詞

要求的態度動詞とは、奥田 1968-72 の〈モーダルな態度のむすびつき〉の下位分類である〈要求的な態度のむすびつき〉の連語を構成する動詞である。〈要求的な態度のむすびつき〉とは、動作性名詞をヲ格にとり、要求相手でありかつヲ格動作性名詞が表わす動作の動作主である相手ニ格をとって、「要求相手-ニ 動作性 N-ヲ 要求的態度 V-スル」という構造を持つ連語タイプである。

「要求相手-ニ 動作性 N-ヲ 要求的態度 V-スル」におけるヲ格の動作性名詞を主語にした受身文の個別具体的なタイプが〈要求型 (I1 態度)〉(セル 15) である。この個別具体的な事態である〈要求型〉は極めて頻度が低く、統計を取ったデータには典型的な用例は見つからなかった。次のような受身文である。

(121)しかし、司祭には告悔の秘蹟を拒絶する権利はどこにもなかった。秘蹟は求められれば自分の感情によってそれを承諾したり拒んだりできるものではなかった。(沈黙.地) ☆

(122)その席で、小川所長は、第二号艦の完成期日の大幅な繰上げが、海軍艦政本部から二回にわたって要求されていることを発表した。(戦艦武蔵.地) ☆

(123)政府筋によれば、カーン博士には国家予算にも計上されない膨大な核開発資金の運用が任されていたが、この中から同博士や知人が個人的資産を築いた疑いがあるという。(毎日 2月 17日) ☆<sup>264</sup>

(124)闘病の初期には、放射線治療の合間を縫って数日間の帰宅が許された。(毎日 3月 16日) ☆

一方で、他の心理動詞同様、要求的態度動詞による非情主語受身文でも、動作主が不特定一般の人々で反復のAspectであるタイプは非常に頻度が高くなる。要求的態度動詞の〈習慣的社会的活動型〉には、〈社会的関心型 (I1 社会)〉(セル 16) と 〈社会的約束手型 (I1 社会)〉(セル 16) の2つのタイプがある。

〈社会的関心型 (I1 社会)〉は、ある実体の活動や状態といった広義属性に社会的関心が集まっていることを表わす受身文で、要求的態度動詞のうちの要求・願望を表わす動詞で構成される。また、〈社会的関心型〉は、思考動詞の一部<sup>265</sup>も要素になる。次のような受身文である。

(125)本部の対応が求められている／注目されている／問われている。〈社会的関心型〉

(126)いい結果が期待されている／予想される。〈社会的関心型〉

(127)記憶力が要求される／危ぶまれる／問われる。〈社会的関心型〉

〈社会的関心型〉は、新聞テキストに特徴的な受身文タイプで、他のジャンルでの頻度はそれほど高くないものの、新聞テキストでは〈実行型 (I1 変化)〉について、非常に高い頻度を見せている。この〈社会的関心型〉は、誰が当該の動作や状態を要求ないし望んでいる

<sup>264</sup> 「任される」には、ニ格名詞句に「有情者」ではなく「有情者の所有物」が立つ、次のような例が見られる(波下線)。

・ カウンセリングも一部では行われているが、面接委員の人選や指導内容は各刑務所の裁量に任され、書道やそろばんを教えるだけのところもある。(毎日 5月 27日) ☆

<sup>265</sup> 「見直される、注目される、懸念される、心配される、危ぶまれる、疑問詞される、予想される、見込まれる、etc.」などの動詞。

かといった行為の具体性が希薄であるためか、非常に間接的な「願望・当為」のモダリティ表現に意味的に近づいている。

なお、要求的程度動詞の中でも「期待される」など、相手への要求的な働きかけの少ない動詞では、思考動詞同様、ラレル形で述べられると話し手が動作主に含まれることが暗示され、**自発用法**との境界が曖昧になる。

(128)日本人選手の活躍が期待される／予想される。

ところで、〈要求型 (I1 態度)〉の頻度が極めて低いのは、要求的態度動詞による受身文が個別具体的な事態の場合には、要求相手を主語に立てた〈**被相手要求的態度型 (AA 態度)**〉で述べられることが多いことも関係している。

(129)a. わたしは教官に部屋の掃除を頼まれた。〈被相手要求的態度型〉

b. 党本部は対応を求められた。〈被相手要求的態度型〉

c. 司祭は役人に秘蹟を要求された。〈被相手要求的態度型〉

さて、要求的態度動詞によるもう1つの〈習慣的社会活動型〉である〈社会的約束型 (I1 社会)〉は、許可・禁止を表わす動詞で構成される。この許可・禁止を表わす動詞による非情主語受身文も、やはり動作主が不特定一般の人々である〈社会的約束型〉で述べられる方が多い。

(130)学生には、いつでも研究室に入ることが許されている。〈社会的規制型〉

(131)子供の入場は禁止されている。〈社会的規制型〉

以上のように、本研究では〈要求型 (I1 態度)〉に対応する〈習慣的社会活動型〉を、要求・願望を表わす動詞によるタイプ (社会的関心型) と許可・禁止を表わすタイプ (社会的約束型) に分けたが、これは、前者が要求・願望を表わす動詞と思考動詞の一部で構成される1つの意味・構造的なタイプであると見なしたためである。

以上、まとめると、要求的態度動詞の非情主語受身文は、個別動作主の個別具体的な事態である〈要求型〉の頻度はきわめて低い。一方で、他の心理動詞同様に、動作主が不特定一般の人々である習慣的社会活動としてのタイプの頻度は低くない。特に〈社会的関心型〉は、新聞テキストにおける頻度が高い。また、〈要求型〉の頻度が低い理由は、個別具体的な事態であると、要求相手を主語にした有情有情受身文 (被相手要求的態度型) で述べられることが多いということもある。

## 2.3 接触動詞の受身文の分布の偏り

無変化動詞である接触動詞による受身文は、有情主語と非情主語の受身文で、違いが明確に表れる。本項では、この接触動詞の受身文について、主に次の2点を議論していく。

1点目は、接触動詞による受身文の、主語の有情・非情の別による頻度の違いについてである。接触動詞による受身文は、有情有情受身文の〈被接触型 (AA 無変化)〉の頻度はきわめて高いのに対し、非情一項受身文の〈無変化型 (I1 無変化)〉は、すべてのテキストを通

じてほとんど用例がない。〈無変化型〉の頻度が低いのは、行為の「結果」の局面を捉える非情一項受身文に、無変化動詞である接触動詞が要素としてなじまないためと考えられる。一方、〈被接触型〉の頻度が高いのは、有情有情受身文が動作プロセスの局面をも捉える受身文であるということ、また、「有情者-ヲ 接触動詞」という連語自体が、対象への評価的な態度を表わすことが多いためと考えられる。

2点目は、接触動詞による非情一項受身文において、通常非情物が主語に立つ場合と、有情者の所有物が主語に立つ場合の意味・構造的な違いについてである。接触動詞による非情一項受身文は、通常非情物が主語に立つ場合は、動作主の働きかけによって、主語に立つ対象が持つ機能が発現する意味を表わすか、接触動詞が変化動詞相当の意味を表わしていることが多い。これに対し、有情者の所有物が主語に立つ場合は、有情有情受身文の〈被接触型 (AA 無変化)〉に非常に近い意味を表わす。つまり、有情者の所有物が主語に立つ場合に、潜在的受影者のいる受身文になることが、非常に分かりやすく読み取れる。

以下、それぞれについて詳しく見ていく。

### 2.3.1 無変化動詞である接触動詞

接触動詞とは、対象に物理的に働きかけながらその対象に変化をもたらさない、無変化動詞の代表である。通常、動作主が意志を持って対象に働きかける場合、対象に何らかの変化を引き起こすのが普通である。つまり、対象への働きかけは、その対象を変化させることを前提としている。奥田 1968-72 も、〈対象へのはたらきかけ〉の冒頭で、次のように述べている。

(132)対象へのはたらきかけをあらわす、を格の名詞と動詞とのくみあわせでは、かざり名詞が物や人、現象や状態へ過程や関係などをさししめして、かざられ動詞でしめされる動作がそれになんらかのし方ではたらきかけていく。このばあい、はたらきかけをうける物や人や現象などに、なんらかの変化がひきおこされるのがふつうである。(同 p23)

しかしながら、ある種の他動詞では、対象の変化をその語彙的な意味に含んでいない。こうした無変化動詞の代表である接触動詞について、奥田 1968-72 は〈ふれあいのむすびつき〉の説明の中で、次のように述べている。

(133)ふれあいのむすびつきをあらわす連語では、を格の名詞でしめされる物へのはたらきかけが、なんの変化もよびおこさないで、たんなる接触あるいは把握におわっている。しかし、観察 266や感情表現 267のようなばあいをのぞいて、物にたいする物理的なはたらきかけが、その物になんの変化をももたらさないなら、それは無意味である。したがって、おおくのばあい、ふれあいのむすびつきは、物にたいして物理的にはたらきかけて、それを変化させる全過程のうちから、接触の段階あるいは接触のし方だけをとりだして、表現しているといえるのである。このことは、なぐりこらす、うちたおす、かみくたく、にぎりつぶす、ひきぬく、うけとめるのようなあわせ動詞の存在が証明してくれる。(同p36, 太字原文, 波下線及

266 「(食べごろかどうか判断するために) すいかをたたく」のような場合。

267 「彼女のほおをさする」が「いとおしむ」感情、「給仕盆のへりを指のはらでなでる」が「もじもじする」感情を表わすような場合。

び脚注志波)

このように、接触動詞は、他動詞でありながら、対象を変化させる過程のうちの、接触の段階だけを表わすという特殊な動詞である。

なお、奥田 1968-72 は、接触動詞の対象が人間である場合の意味の違いについて、特に考察を行っていないが、以下で述べるように、対象が有情者である場合は、接触動詞が評価的な態度の意味を帯びることが多いようである。以下、この点も含め、接触動詞の受身文について述べていく。

### 2.3.2 接触動詞による受身文の頻度の偏り

接触動詞による受身文タイプには、有情者が主語に立つ有情有情受身文の〈被接触型 (AA 無変化)〉と、非情物が主語に立つ非情一項受身文の〈無変化型 (I1 無変化)〉がある。この2つのタイプは、同じ接触動詞で構成されながら、頻度がまったく異なっている。有情有情受身文の〈被接触型〉の頻度は非常に高いのに対し、非情一項受身文の〈無変化型〉の頻度は非常に低くなっている。これには、次のような理由が考えられる。

非情一項受身文とは、動作主を背景化して「何が起きたか (起きるか)」という出来事の生起そのもの (=結果) に注目する、もしくは、ある実体の上に「何が起こったか (起こるか)」という、動作主の対象への働きかけのプロセスよりもその対象の上に起きた変化 (=結果) を中心に捉える受身文タイプである。よって、対象の変化に無関心である接触動詞は、この受身文タイプの要素としてはふさわしくない動詞であると言える。次の例で、変化動詞の受身文と比較してみたい。

- (134)a. 男は壁を作った／赤く塗った／崩した。  
b. 壁が作られた／赤く塗られた／崩された。  
(135)a. 男は壁を蹴飛ばした／殴った／さすった。  
b. 壁が蹴飛ばされた／殴られた／さすられた。

(134) bの受身文は、対象に起きた変化を捉えた受身文として、文脈の構造がなくても自然な文と解釈できる。これに対し、(135)bの接触動詞による受身文は、この文だけを見ると「なぜそのようなことを (誰かが) しなければならないのか」という疑問が生じる。そもそも、動作プロセスを捉えた (135) aの能動文でも、当該動作を行う何らかの理由を読み取りたくなる。例えば、むしゃくしゃしていたから、とか、何かを調べるために、といったことである。受身文になると、文脈の支えがなければこうした理由を読み取ることができずに、不自然に感じられるのである。

一方で、有情者が対象になる場合には、受身文にこうした不自然さは生じない。

- (136)a. 良子は和夫をたたいた／殴った／蹴飛ばした／抱きしめた。  
b. 和夫は良子にたたかれた／殴られた／蹴飛ばされた／抱きしめられた。

有情有情受身文における接触動詞が不自然にならないこと理由は、今のところ2つ考えられる。1つは、有情有情受身文が、動作の結果を含みつつも動作のプロセスをも捉えうる受身文であるということである。有情有情受身文では、動作主は主語に立つ受影者と対峙す

る主語として、構造上必須の要素になることが多い。こうした有情有情受身文では、動作主は背景化されずに、まさに動作プロセスが逆の視点(対象の視点)から捉えられている<sup>268</sup>。このため、主語の「変化(結果)」よりも《対象=受身者vs.動作主=主語》という有情者と有情者の間の「関係」が捉えられる。その「関係」のあり方(様態)として、接触動詞による行為が捉えられるため、接触動詞による受身文が不自然ではなくなると考えられる。一方で、接触動詞による〈被接触型(AA無変化)〉は、要素となる動詞が動作プロセスを捉える接触動詞であるからこそ、動作主が義務的な要素となり、変化よりも二者間の関係が捉えられる受身文になる、とも言える。この構造と要素との関係は常に双方向的である。

2つ目の理由であるが、有情者を対象とする接触動詞の文は、能動文であれ受動文であれ、動作主の対象に対する何らかの「態度」を読み取らずにはいられない。すなわち、「有情者-ヲ 接触V-スル」という連語タイプは、「可愛がる、いじめる」などの評価的処遇動詞に近づいていると考えられる。評価的処遇動詞は、その語彙的な意味に感情=評価的な態度を含みつつ、そうした態度で対象に働きかけることを表わしている。しかし、その働きかけ方の具体的な様態は語らないことが多い<sup>269</sup>。接触動詞は、この感情=評価的な態度を含む働きかけの具体的な様態を語る動詞として機能していると考えられるのである。例えば、「人-ヲ たたく、殴る、ぶつ」などは怒りといった感情、「人-ヲ 抱く、抱きしめる」などは愛情といった感情を表わす手段としての動作となる。ただし、接触動詞のこうした評価性はデフォルトでの解釈にすぎず、文脈の構造によっては、態度を含まない解釈もありうる点で(「(和夫の目を覚まさせるために) 良子は和夫をたたいた」)、評価的処遇動詞とは異なっている。なお、付け加えると、評価動詞による有情有情受身文の頻度は非常に高い。

以上のような理由から、非情一項受身文の要素としてはなじまない接触動詞(無変化動詞)が有情有情受身文では自然に、高い頻度で現れているものと考えられる。

### 2.3.3 接触動詞の非情主語受身文(無変化型)

こうして、接触動詞による非情一項受身文の頻度は低いのであるが、このタイプの表わす意味の観察から、次のことが明らかになった。有情者の所有物でない、通常非情物が主語に立つ場合は、動作主の働きかけによって、主語に立つ対象が持つ機能が発現する意味を表わすか、接触動詞が変化動詞相当の意味を表わしていることが多い。これに対し、有情者の所有物が主語に立つ場合は、有情有情受身文の〈被接触型(AA無変化)〉に非常に近い意味を表わす。接触動詞による非情一項受身文では、このように、有情者の所有物が主語に立つ場合とそうでない非情物が主語に立つ場合の意味・機能の違いが非常に分かりやすいため、ここで取り上げることにした。

非情物が主語に立つ接触動詞による受身文は、何らかの動作主のはたらきかけによって、対象の機能が発現することを表わすことが多いため、これを〈無変化型(I1無変化)〉と名づけた。主語には具体名詞ないし現象名詞が立ち、動詞には対象を変化させることのない、接触動詞や同属目的語を取る無変化動詞が要素となる。

<sup>268</sup> 事態の流れを「動作主の動作⇒対象の変化⇒対象の状態{⇒事態の履歴}」と簡単にモデル化すれば、非情一項受身文は「対象の変化」の局面を中心に捉えるタイプであるのに対し、有情有情受身文は「主体の動作」の局面と「対象の変化」の局面のいずれも捉えるタイプであると考えられる。

<sup>269</sup> 「愛撫する」などは、感情=評価的な態度と働きかけの様態(なでてさする)を含む評価的処遇動詞である。

## (137) 無変化型

|            |          |
|------------|----------|
| 具体／現象 IN-ガ | 接触 V-ラレル |
|------------|----------|

対象〔主語〕 的要因による機能発現〔述語〕 【個別有情行為者】

「鐘が鳴らされる／ドアが叩かれる」

次のような接触動詞が〈無変化型〉の要素となる。

(138) 打たれる, 押される, 押さえられる, 引かれる, 引っ張られる, 触れられる, 触られる, 叩かれる, 突かれる, つかまれる, 握られる, 踏まれる, etc.

また, 光や音や臭いなど知覚で捉えられる現象を引き出す, 同属目的語を取る「(舞いが)舞われる」「(楽器が)演奏される」のような動詞も要素となるが, 本節では接触動詞による受身文を中心に述べていく。

## 2.3.3.1 通常 of 非情物が主語に立つ場合

接触動詞による非情主語の受身文は, 頻度が非常に低い上, ジャンルも実験的な文体の多い小説の地の文にはほぼ限られる。次の例は, そのように対象に接触することで, 対象の持つ機能を引き出すか, 対象に何らかの機能を果たさせることを表わしている。対象から何の機能をも引き出すことなく, 単に対象に接触するだけの事態を表わす例はほとんどない。

(139) はじめ周二はたいそうな時間を要したが, 毎度繰返してゆくたびにその時間が短縮し, 自分でも興味を示しだして, ストップ・ウォッチが押される前には意気こんで手に息をふきかけて待機するようになった。(楡家.地) ☆

(140) 「よばはりましたんとちがいまっか。 麻繩がひっぱられましたんどす」(雁の寺)

(141) このとき, 廊下に足音がして, 戸が叩かれた。(冬の旅.地) ☆

(142) 楽器というよりは美術工芸品として十分に通用しそうだった。[中略]おそらく それはかなり長いあいだ人の手に触れられることもなく放置されていたのに違いない。(世界の終わり.地) ☆

(143) 今はその束縛がとれ, 心理の垂幕は引きちぎられ, 現にトランペットとトロンボーンは調子よく鳴りわたり, クラリネットが甲高い響きを上下させ, 太鼓とシンバルまでが勇ましく叩かれている。(楡家.地) ☆

(139) は「時間を計る」という機能, (140) は「人を呼ぶ」, (141) は「入室の合図」, (142) と (143) は「音を奏でる」という機能を主語に立つ対象自体が持っている, それが動作主の働きかけによって引き出されたことが述べられている。

また, 次の例は, 変化動詞に近づいている。(144) は作成動詞ないし「書かれる」などの書記動詞に近いし, (145) はテクル形式を伴って位置変化動詞に近づいている。

(144) これが、「X日を十二月八日午前零時と定め、開戦」の意味であることは、周知の通りだが、一般に誤って解されているように、この短文そのものが暗号で、「ニ、イ、タ、カ、ヤ、マ、ノ、ボ、レ」と モールス符号が打たれたわけではない。(山本五十六.地) ☆

(145) 大勢の従業員がばらばらと寄ってきて、飯を容器に移しはじめた。むこうでは大鍋から汁をよそっている。アルミニウムの食器がかちゃかちゃ鳴る。下に車のついた配膳台が押され

てくる。日に三度の、慌しくも活気のある光景なのである。(楡家.地) ☆

次の (146)は少し異質であるが、これは「足の下に」とあることから、存在文に近づいている。

(146)そこで、棟から棟へ渡ると、もっとも新らしい木の色から、もっとも古い木の色にいたるまでの、各種の濃淡のモザイクが、足の下に踏まれた。(金閣寺.地) ☆

### 2.3.3.2 有情者の所有物が主語に立つ場合

次に、主語が有情者の所有物としての非情物である接触動詞の例を挙げる。同じ接触動詞による受身文でも、主語が有情者の所有物（主に身体部位）である以下の受身文は、先に挙げた (139)- (143)とは異なり、対象の機能を発現させるというような意味はほとんど読み取れない。むしろ、「有情者が与影者である動作主から接触の働きかけを受ける」という〈被接触型 (AA無変化)〉の受身文とほぼ同じ意味を表わしている。その構造的な表れとして、先の (139)- (143)の例では動作主が誰であるかということは問題にされず、明確でないのに対し、以下の例ではある個別の動作主の存在が明確に読み取れる。また、接触の動作を行うための道具や接触動作の様態が副詞句として現れることが多いのも特徴的である。

(147)もし私が私の傲慢によって、罪に堕ちようとした丁度その時、あの不明の襲撃者によって、私の後頭部が打たれたのであるならば——(野火.地) ☆

(148)信夫は思わずふじ子の手を取った。細い柔らかい手が、信夫の両手に素直に握られた。とけてしまいそうな柔らかなその手を握っていると、ふじ子の細々とした命がじかに感じられて、信夫は胸がつまった。(塩狩峠.地) ☆

(149)鮎太は物も言わずに、雪枝の前をすり抜けると、そこから駈け出そうとした。が、鮎太の腕は雪枝の手に掴まれていた。(あすなる.地)

(150)私の背が柏木の尖った指先で押された。私はごく低い石塀をまたいで、道の上へ跳び下りた。二尺の高さは何ほどでもなかった。(金閣寺.地) ☆

(151)税関の列は長かったが私の場合は実に簡単に済んだ。ほとんどの人がスーツケースなどを開かれ念入りに調べられていたのに、私のものだけは全く手も触れられなかった。(若き数学者.地) ☆

(152)竹小刀が胃袋の左脇でぐいっと上部へ移行して心臓を大きくえぐったのだ。つづいて、慈海の腹はもう一本の肥後守でとどめをさされるように力強く突かれた。血がふき出した。[中略] 蔦の葉の上でけいれんを止めた慈海の軀を黒い影が抱き起していた。影は本堂との間にある中門を押した。慈念である。(雁の寺.地) ☆

(153)私は自分の頭が皮や肉をそがれ脳味噌を取り去られてその棚に並び、老人にステンレス・スティールの火箸でこんこんと叩かれる様を想像してみた。(世界の終わり.地) ☆

(154)そして僕は数人の外国兵が笑いざわめきながら僕の躰へ腕をかけるのをどうすることもできない。[中略] 僕は四足の獣のように背を折り曲げ、裸の尻を外国兵たちの喚声にさらしてうなだれていた。僕は躰をもがいたが両手首と首筋はがっしり押さえられ、その上、両足にはズボンがまっわりついて動きの自由をうばっていた。(人間の羊.地) ☆

こうした、有情者の所有物が主語にたつ非情一項受身文は、有情者が主語に立つ、「AN-

「**が AN-ニ 身体部位 N-ヲ 接触 V-ラレル**」という持ち主の受身の構造の〈**被接触型 (AA 無変化)**〉に非常に近い意味を表わしている。

(155) 「**ひとかどの武将たる者**が、**茶坊主**に頭を叩かれたのだ」[後略] (さぶ)

(156) 連絡船が出るまでには四十分の間があったが、船までの長いホームを**旅客**がいい席を取るため、気ちがいのように競走していた。**三原**は背中を何度も**こづかれた**。(点と線.地)

(157) そのとき、**利兵衛**は**刑事**に右手首をつかまれ、この野郎なぐってやろうか、と思ったとき、手錠がかかった。しまった! と思ったときはすでにおそかった。(冬の旅.地) ☆

以上、本節では、接触動詞による受身文の特徴をまとめて述べた。接触動詞による受身文は、主語=対象が有情者であるか、非情物であるかで、用例の頻度に大きな差があること、それは両受身文タイプの意味・構造的な特徴に要素としての接触動詞がなじむか否かが関与していることを述べた。また、有情主語か非情主語かで大きな違いを見せる接触動詞の受身文では、主語が非情物であっても、それが通常の非情物か、有情者の所有物かでかなりの違いを見せることを示した。

### 3 テクストジャンルによる受身文タイプの特徴

第7章では、テキストジャンル別の受身文タイプの割合を示した。この統計を見れば明らかに、話しことばテキストに近い小説の会話文テキストと書きことばテキストである評論文及び新聞テキストでは、受身文の主語の別による割合がほぼ正反対になっている。会話文テキストでは、有情主語受身文が8割以上であるのに対し、評論文テキストでは非情主語受身文が9割前後ある。また、小説の地の文テキストでは、有情主語受身文と非情主語受身文が約半々の割合で表れており、話しことばと書きことばの特徴を半分ずつあわせもっているように見える。この結果は、それほど驚くべき数値ではないが、主語の有情・非情の別が、テキストジャンルの違いに特徴的に連関していると言える。

話しことばテキストに有情主語の受身文が多く、書きことばテキストに非情主語の受身文が多いという違いは、単に文一般に話しことばでは有情者が主語になる文が多く、書きことばでは非情物が主語になる文が多いということによるものではない。話しことばで用いられる有情主語受身文は、書きことばではほとんど用いられず、逆に、書きことばで用いられる非情主語受身文は、話しことばではほとんど用いられないのである。これは、**客観的な叙述を主とする書きことばの文脈構造に有情主語の受身文タイプが要素としてなじまず、また逆に、話し手の私的な感情を述べることが多い話しことばの文脈構造には、非情主語の受身文タイプがなじまない**、ということである。

例えば、話し手(視点者)の主観的感情が「はた迷惑」という意味で直接的に表わされると考えられる有情主語受身文の〈**被はた迷惑型 (AA迷惑)** (いわゆるはた迷惑の受身)〉は、書きことばテキストには1例も用例がなかった。その他の有情主語受身文の頻度も非常に低い。一方で、有情者が主語に立っても、公の場における有情者の変化だけが淡々と述べられ



るような〈被社会的状態変化型 (AA変化)〉は、書きことばテキストでも比較的用例がある。この〈被社会的状態変化型〉は、動作主が社会的組織であることが多く、この場合は《受影者=対象 vs. 動作主=与影者》という関係を述べる受身文ではなくなり<sup>270</sup>、客観的な叙述の文脈構造にも自然に用いられるものと考えられる。

この逆に、書きことばテキストで頻繁に用いられる次のような受身文は、話しことばでは何らかの自動詞で表現するのが普通だろう。

(158) 来週、中央公園で運動会が行われる。(cf. 運動会がある)

(159) 多摩川沿いに大きなテーマパークが建設された。(cf. テーマパークができた)

(160) この投書が紙面に掲載されるころには年も明けている。(cf. 投書が紙面に載る)

また、対応する自動詞がない無対他動詞の場合は、行為者が不特定である他動詞文で表現するのではないかと考えられる。非情一項受身文を用いると、かなり堅苦しい表現になる。

(161) a. その市庁舎は、50年代に改修され、18世紀の姿に戻された。

b. その市庁舎は、50年代に改修して、18世紀の姿に戻ったんだよ。

このように、有情主語の受身文と非情主語の受身文は、その意味・機能が根本的に異なっているため、テキスト、すなわち文脈構造の違いに、その頻度の差が表れているものと考えられる。

以上述べたことは、主語の有情・非情の別による受身文タイプの現れ方と文脈構造（テキストジャンル）との関連についてである。より細かい受身文タイプの現れ方とテキストとの関係については、第7章で詳しく議論している。

## 4 従来指摘されてきた受身文タイプについて

本節では、従来指摘されてきた受身文タイプについて、本研究の記述から明らかになったことを述べる。4.1では属性叙述受動文について、4.2では相手の受身について、4.3では受影性について簡単に述べる。そして、第1章2.3で紹介した、従来の研究において指摘されてきた受身文タイプが、本研究の意味・構造的なタイプのいずれに相当するかという点について、4.4で述べることにする。

属性叙述受動文については、益岡 1982, 2000では「対象の属性を叙述する」という定義にとどまらず、「動作主が二格で表示され、かつ受影の意味を帯びない」受身文であると考えられている。このことに関連して、本研究で表れた非情主語で有情者の動作主が二格標示された例を提示する。また、動作主が二格で明示されるという規定に従うと、属性叙述受動文の出現頻度は大変低いものになるが、この規定を設けなければ、本研究のデータにも属性叙述受動文がそれなりの頻度で表れていることを示す。

<sup>270</sup> 〈被社会的状態変化型〉でも、「離縁される、勘当される」などは、《受影者=対象 vs. 動作主=与影者》という個人と個人の関係が捉えられると言える。

相手の受身については、同じ動詞グループであってもすべての連語において等しく相手の受身が成立するわけではないことを指摘する。従来、間接受身（はた迷惑の受身）と直接受身（まともな受身）の境界に位置づけられると一般に考えられていたのは「持ち主の受身」であった、しかし、相手の受身の中にも、例えば「わたしは和夫に秘密をしゃべられた」、「わたしは良子に本を売られた」など、〈被直接作用型〉としては不自然な表現になるか、はた迷惑の意味を帯びる動詞がある。本研究の受身文タイプとの関連から、どのような動詞が相手の受身として成立しにくいかを提示する。

受影性については、どのような構造的要因が受影の意味の表れに関わるかを述べた上で、現段階での文法研究においては、受影の意味を受身文の意味・構造上の問題として扱うには限界があることを述べる。

## 4.1 属性叙述受動文について

属性叙述受動文は、先に 第1章 2.3.6 で体系内での位置づけが難しい受身文として概観した。これは、益岡 1982 で提唱された受身文タイプで、「所与の対象の属性を叙述することをめざして、ガ格以外の名詞句をガ格（主題）に昇格させる受動文」（益岡 1987:188）と定義されている。本節では、この属性叙述受動文について、本研究の受身文タイプの分析から分かったことを述べていく。

### 4.1.1 非情主語動作主二格標示の文

属性叙述受動文の定義は上で述べたとおりである。しかし、益岡 2000 の用例と説明を見る限りでは、単に「属性を叙述する」という定義にとどまらず、「人間の動作主が二格標示され、かつ受影の意味を帯びない」という規定が想定されていることが読み取れる。このような意味・構造的特徴を持つ受身文のみを属性叙述受動文とするのであれば、本研究で扱ったデータ内には、属性叙述受動文は3例だけ見つかった。(162)は、組織が動作主であるが、これは「主体性のない」といった属性付与とも考えられ、属性叙述受動文と見なせるだろう。また、(163)は、「よくできている、佳作である」という属性付与と考えられる。ただし、これらの例に受影の意味がないかどうかは難しいところである。

(162)わたしも日教組に牛耳られている現在の高校教育というものには根本的に疑問があるとおもっている。(聖少女)

(163)「[前略]きつとオ、あんたの人形さんはみんなに賞められますわ」(越前竹人形)

次の例は、「パブロフは一般の人々に名前が知られている」という「は—が構文」であるが、これも非情主語の例として扱った。「名が知られている」という受身文は、「有名である」という属性を叙述していると言える。

(164)パブロフはロシアの脳生理学者ですが、脳生理学者で一般の人々にこれほど名前の知られている人はいないと思います。なにしろ「パブロフのイヌ」などということばがよく使われるほどです。(記憶)

そもそも、非情物が主語に立ち、かつ有情者の動作主が二格標示された例自体が非常にまれで、上の3例以外では、本研究のすべてのテキスト内で6例のみである。次の例は、有情者の広義所有物が主語に立っていて、益岡 1991aの潜在的受影者のいる受身文である。ただし、(166)と(167)は、主語の格表示がないので、持ち主の受身とも考えられる。先の(163)も、有情者の所有物が主語に立っていて、潜在的受影者のいる受身文とも考えられる。

(165)俺たちは、わるいようにはしない。貴様はいままでのことが校長に知られずにすむし、俺たちのことはばれない。(驢馬)

(166)「前の課長も君の企画を会議に出すことは出したらしいがね、山持ちの県会議員に一蹴されたらしいよ。これは局長も文句をいえやしない。[後略]」(パニック)

(167)「その風呂敷は、昨日、派出所から送って来たんだが、木こりの弁当包みなんだ。うっかり地面において仕事している間にやられたんだそうだ」／ 「やられた、というと？」  
「ネズミさ、ネズミにかじられたんだよ。中身の竹の皮やニギリ飯なんか、跡形もなかったそうだ。[後略]」(パニック)

次の例では、主語は所有物とは言いにくい、「小泉くん」という人物が好んで利用している場所(店)ということで、潜在的受影者のいる受身文と考えられる。また一方で、「占領する、支配する」という動詞は、動作主と対象との関係をも表わしているので、動作主の明示は義務的である。

(168)「[前略] とういうわけか知らないけど、いつのまにかレストランになってたんですって。みつけたのは小泉くん。でも彼、日本人の学生には内緒にしてるの。この狭い店が日本人に占領されたら面白くないからって」(ドナウ)

次の(169)と(170)は、有情者の動作主が二格標示されていても受影の意味を帯びていない上、属性を叙述する受動文とも言えない、特殊な受身文である。認識動詞の一部が要素となっているのが特徴で、こうした受身文を構成する動詞は、他に「意識される、認識される、気づかれる、理解される、了解される」などが考えられる。

(169)特別昇格は、評価面で一般職女性が受けていたしわ寄せを一気に解消することを目指して行われた。[中略]「女性に任せようとしても、心理的、システムの的に制約があった。これからはできる人はどんどん使える」と男性にも好意的に受け止められているという。(毎日)

(170)それは、脳に送り込まれてくる情報の大部分は、本人に感覚されないことがわかってきたため、感覚されない情報が感覚器から送られてくるというのはおかしいからなのです。(記憶)

なお、工藤 1990 では、非情物が主語の場合は、基本的に有情者の動作主を二格で表示することはできないとしている。これは、益岡 1991a の〈潜在的受影者〉のいる受身と〈属性叙述受動文〉というタイプの提案によって修正されるものだが、工藤 1990 が非情主語でも二格標示を許すとする受身文で、潜在的受影者がいるとも、属性叙述とも解釈できない受身文がある。それは、工藤 1990 が、「二格名詞句が「単なる行為者ではなく、行為者であると同時に所有者ともなる場合」として挙げている例文の一つである(工藤 1990 : 74-5)。

(171)発見された死体は、……久子に引き取られた。(ゼロの焦点)

この「引き取られる、持ち去られる」といった動詞は、二格の動作主が対象の移動先である着点でもある。つまり、〈位置変化型〉に似ていると考えられ、着点=動作主の明示が構造上義務的になるのではないだろうか。

このほか、次の例は、有情動作主の周辺に含めたが、動作主性は非常に低い。特に、(173)の「一般」は能動文の主語にそのまま立つことはできない。しかし、(173)は、「普通であった」というような属性叙述になっているとも考えられる。(172)は、反復のアスペクトではなく、未来のテンスで述べられているので、属性叙述とは言いにくいだろう。

(172)——これからの課題は何ですか。◆デリバティブ（金融派生商品）の大証と自負しているので、デリバティブの分野で世界に注目されるよう力を入れていきたい。(毎日)

(173)文明は人間の未来を明るく彩るものであり、[中略]男は男性的であり、女は女性的であり、円はドルの敵ではなく、人間がいかなる悪さや悪企みをしようと地球は大盤石である、などの常識が一般にはまだ信じられていた。(ブンとフン.地)

#### 4.1.2 動作主が明示されない属性叙述受動文

益岡 2000 でも、属性叙述受動文の頻度の低さが指摘されており、よって、周辺的な受身文であると述べられている(同: 58)。また、金水 1992a/1993 は、属性叙述受動文は近代以降に増加した新しいタイプの受身文であると述べている。つまり、日本語の受身文体系の中では、未だタイプとして定着していないのだろう。

一方で、属性を叙述するような受身文は、「非情主語動作主二格標示」という制約がなければ、少なからずテキストの中に現れている。

本研究の受身文タイプで言えば、〈社会的評価型〉と〈社会的思考型〉、及び〈社会的呼称型〉の中に属性叙述受動文と呼べそうな受身文がある。これらのタイプは、すべて動作主が不特定一般の人々で、反復のアスペクトで述べられる受身文タイプである。通常、人間の動作主が二格標示されると、受影の意味を帯びることが多いのに対し、この属性叙述受動文は受影の意味を帯びない受身文として知られている。属性叙述受動文が受影の意味を帯びないのは、この受身文が典型的には非アクチュアルな、個別具体的ではない事態で、動作主が不特定一般の人々である<sup>271</sup>ことと関係しているだろう。

例えば、〈社会的評価型〉には、次のような受身文がある。益岡 2000 では、有情者が主語に立つ属性叙述受動文もあると述べられているので、有情主語の例も挙げておく。

(174)前衛画家としての立場から彼は新手法の紹介には熱心で、[中略]さいきんでは印画紙のうえにさまざまな物をのせて感光させる“フォト・デッサン”を発表した。小学校の子供には材料費が高すぎるという非難を浴びながらもそれはひとつの意欲的な試みとして評価された。(裸の王様.地)

(175)近年は、脳の話がもてはやされる傾向がありますが、人間の行動や精神活動が脳という物質の現象として説明される科学性に新鮮さが感じられるからでしょう。(記憶)

<sup>271</sup> ただし、属性叙述受動文には、動作主が百貨辞典的知識として著名な、有名人である場合にも成立する。  
・この論文はチョムスキーに数回引用された。(益岡 1987: 190)

(176)「いえいえ、決して開業していかぬというわけではありません。現に札幌にも古い方法でやっている人もいます。でもそういうところはやはり自然に敬遠されるようです。[後略]」(花埋み)

(177)しかし、同じ業種の中では、環境保全に努力している企業が選ばれているようだ。(毎日)

(178)イギリスの女流推理作家で、多くの読者に親しまれているアガサ・クリスティーの自伝に、次のような一節がある。(ゆとり)

抽象名詞が主語に立つ、次のような〈社会的評価型〉も、「優先的である、重要である」というような属性を付与されていると考えられる。

(179)ここで重要なことは、この「家」集団内における人間関係というのが、他のあらゆる人間関係に優先して、認識されているということである。(タテ社会)

(180)こういったことを考えてみると、日本の四季は、新鮮な食品を得られる面でも世界的にみて珍しい国であるといえるのだ。／ 以上のようなことから、とうぜんであるが日本では素材がひじょうに重視される。(たべもの)

このように、「有情者の動作主が二格標示される」という制約がなければ、属性叙述受動文と呼べる受身文はそれほど少なくはない。次の例では、カラ格で動作主が標示されているが、これも益岡が規定する意味での属性叙述受動文と言えらるう。

(181)とかく外国製品が高くて故障しやすいのにひきかえ、安くて品質のいい日本製品は、世界中の消費者から“熱烈歓迎”されている。(ゆとり)

本研究で〈社会的評価型〉とした受身文は、ほぼすべてが動作主は標示されていないものの、主語に立つ対象に有意義な属性を付与する受身文であると言えそうである。

また、益岡 2000 も「彼は一般の人々には著名なエッセイストとして知られている」という例を挙げているが、「N-トシテ/デ 知られる」という〈社会的思考型〉(社会的判断型)も、有情者が明示されていなくても、属性付与という特徴に変わりはないだろう。

(182)東京大進学者の多さで知られる筑波大付属駒場中・高校(東京)。授業中にほおづえをつく姿が後を絶たない。(毎日)

(183)芳古堂は表具と経師とで、格も高く、手堅いので知られていた。(さぶ.地)

しかし、上の(182)と(183)は、それぞれ「名門である」、「格も高く、手堅い」という何らかの評価性を持った判断内容が現れている。これに対し、判断内容に評価性が含まれない次のような受身文は、益岡が提唱する属性叙述受動文とはやや異なっているだろう。

(184)31日の「年末ジャンボ」宝くじの抽選で、「大黒さまの宝くじ」で知られる福島県いわき市の大黒屋デパート売り場から前後賞を合わせ3億円になる1等が1本、2等(1000万円)2本の当たりくじが出た。1等が出たのは15年連続。(毎日)

評価性が含まれないという特徴と関連して、〈社会的呼称型〉の受身文は通常その呼称には評価性は含まれず、これも益岡の意味での属性叙述受動文とは言いにくい。

(185)欧米では環境を重視して商品を選択する消費者は「グリーン・コンシューマー」と呼ばれて

いる。日本でもこの「緑の消費者」は確実にすそ野を広げつつあるようだ。(毎日)

一方で、その呼称に評価性が含まれれば、属性叙述受動文と言えそうである。次の例は、「古くて薄暗く薄気味悪い」というような属性を付与していると考えられる。

(186)その洋館はお化け屋敷と呼ばれている。

以上、本研究の受身文タイプの分析をもとに、属性叙述受動文と呼べそうな受身文について概観した。

#### 4.1.3 日本語に未発達な属性叙述受動文

日本語に未だ属性叙述受動文があまり発達していない背景には、主題化の機能を果たす「は」の存在が考えられる。能動文のまま、対象を「は」で主題化するだけでも、かなり属性叙述的な文になるだろう。

(187)a. この雑誌は、10代の若者によく読まれている。(益岡 1982:58) = 「面白い」

b. この雑誌は、10代の若者がよく読んでいる。

(188)a. 彼は世界中の人々によってその名を知られている。 = 「有名だ」

b. 彼は、世界中の人々がその名を知っている。

また、益岡 1982 は、属性叙述受動文を「昇格受動文」、すなわちいわゆるニ受身文の範疇に属するものと位置づけているが、主語への有意義な特徴づけのために動作主を明示する必要があるのなら、動作主をニヨッテ標示しても属性叙述受動文であることに変わりはない。このことと関連して、属性叙述受動文というのは、もともとは印欧語の受身文に特徴的な類型であると考えられる。印欧語の受身文は英語に代表される「be 動詞 (コピュラ) + 過去分詞」という形式をとることが多いが、この構造は「A は B だ」という命題を述べるための形容詞文及び名詞文と同一であり、よって構造自体が属性規定的な性質を持っている。それは、かなりの過去分詞がすでに形容詞もしくは名詞として語彙化されていることからもうかがえる。また、このような特徴を持っているからこそ、例えば英語では、自動詞による属性叙述受動文までを発達させたのだろう。こうした受身文は、日本語では不可能な表現である。

(189)This bed has been slept in by Queen Elizabeth I .

一方で、日本語におけるラレル文は、今後、ますます受身用法専用の構造へと発展していくと考えられる。自発用法はすでに一部の認識動詞に限られており、また一段動詞の可能用法についても、「ら抜き言葉」の定着とともにラレル文から独立して、可能動詞「V-e-ru/V-re-ru」の構文へと発展しつつある。こうして、ラレル文が受身用法専用の体系へと発展するにつれ、非情主語受身文の動作主ニ格標示についても、制約がゆるくなっていくものと考えられる。こうした変化の中で、属性叙述受動文も日本語の受身文体系の中により定着していくものと想像される。

## 4.2 相手の受身の迷惑性について

鈴木 1972 は、基本的には〈まともな受身 vs. はた迷惑の受身（直接受動 vs. 間接受動）〉という立場に立ちながら、この対立を意味・構造的により精密な分類に修正した。〈まとも vs. はた迷惑〉の構造上の違いは、対応する能動文があるかないかということであった。これに対し、鈴木 1972 は、事態に参与する成分のいずれが受身文の主語に立つのかという観点で分類を見直し、受身文を4つのタイプに再分類した。すなわち、直接対象が主語に立つ〈直接対象のうけみ〉、相手（間接対象）が主語に立つ〈あい手のうけみ〉、直接対象の所有者が主語に立つ〈もちぬしのうけみ〉、動詞の表わす事態には直接関わらない第三者が主語に立つ〈第三者のうけみ〉である。

(190) 直接対象のうけみ：さち子が二郎になぐられた。

(191) あい手のうけみ：花子は太郎に算数をおしえられた。

(192) もちぬしのうけみ：太郎がスリに財布をすられた。

(193) 第三者のうけみ：わたしはとなりのむすこに一晩中レコードをかけられた。

鈴木 1972 の分類は、その後の多くの受身文研究の土台となっていく。その中で、〈持ち主の受身〉は、しばしばその位置づけが議論になったが、〈まともな受身〉と〈はた迷惑の受身〉の境界に位置するタイプであるという見方が一般的だろう。

一方、〈相手の受身〉については、これまで当然のように〈まともな受身（直接受動）〉に位置づけられる受身文と考えられてきた。しかしながら、本研究での分析を通して、二格の相手対象の対象性には、動詞によって非常に差があり、〈まともな受身〉としては成立しにくい動詞も少なくないことがわかった。例えば、「言われる、知らされる」などの言語活動動詞による受身文タイプは、会話文テキストではもっとも割合が高いタイプで、これは〈相手の受身〉である。一方で、同じ言語活動動詞でも、「しゃべられる、話される、述べられる」といった動詞による例は見つからなかった。また、作例をしても、これらの動詞による受身文は、あまり自然な受身文ではないか、「迷惑」の意味<sup>272</sup>を帯びるようである。

(194)a. 和夫は良子に2人の関係をしゃべった／話した。

b. 良子は和夫に2人の関係をしゃべられた／話された。

以下、受身文のタイプ別に少し詳しく見ていく。

本研究で立てた受身文タイプのうち、次の受身文タイプが鈴木 1972 の「あいてのうけみ」に相当する。

〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉：わたしは、和夫に無責任だと言われた。

〈被相手提示型 (AA 認識)〉：わたしは、両親に昔の写真を見せられた。

〈被所有変化型 (AA 変化)〉：わたしは、彼に手紙を渡された。

〈被相手要求的態度型 (AA 態度)〉：わたしは、母に掃除を頼まれた。

<sup>272</sup> ここで言う「迷惑の意味」とは、三上 1953 が提唱しているような、意味と構造が連動した意味での「はた迷惑の意味」ではなく、柴谷 1997a などが議論している意味での「迷惑の意味」である。すなわち、動詞の語彙的な意味に何ら被害性や攻撃性といった意味がないにもかかわらず、受身文になることで強い「迷惑」の意味を帯びるような場合の、「迷惑の意味」のことである。

〈被相手への態度型 (AA 態度)〉: わたしは、誰にも干渉されたくない。

〈被相手動作型 (AA 無変化)〉: わたしは、子供に水をかけられた。

本研究の分類は、用例を観察しながら受身文タイプを取り出し、その後、奥田の連語論を参照してタイプを補足するという形で進められた。この過程で、相手の二格を主語にする受身文タイプの中には、奥田の挙げている動詞に対応する受身文が非常に不自然な表現になる動詞があることに気づいた。

まず、〈被相手言語活動型 (AA 認識)〉であるが、これは、上の (194) のとおりである。〈被相手言語活動型〉では、次の a に挙げたような動詞はよく用いられるが、b に挙げた動詞による受身文は、不自然であるか、迷惑の意味を帯びるだろう。

(195)a. 言われる, 聞かされる, 知らされる, 告げられる, うちあけられる, 告白される, 話しかけられる, 聞かれる, 訊ねられる, 教えられる, ほのめかされる, 相談される, 報告される, etc.

b. 話される, 語られる, 物語られる, 述べられる, しゃべられる, 説かれる, etc.

奥田 1968-72 は、言語活動動詞で構成される〈通達のむすびつき〉の連語の説明の中で、この他に「ぐちる, ふれちらす, ぶちまける, こぼす, 白状する」など、その語彙的な意味において、言語活動の様態がより限定された動詞も挙げている。これらの動詞による受身文も、やはりはた迷惑の意味を帯びやすいだろう。

次に、〈被相手提示型 (AA 認識)〉であるが、このタイプは次のような動詞で構成される。

(196) 見せられる, 示される, 提示される, 指し示される, 指示される, 暗示される, 紹介される, 案内される, 教えられる, 指摘される, 指導される, etc.

この提示動詞による「あいてのうけみ」については、いずれの動詞も「あいてのうけみ」として不自然にはならず、すべて〈被直接作用型〉として見なせるようである。

(197) 和夫は良子に新しい {自転車を見せられた / 友達を紹介された / 家を案内された}。

「見せられる」という動詞のみが、多少迷惑の意味を帯びているようにも感じられる。

〈所有関係変化型 (AA 変化)〉は、次のような動詞で構成されるが、ここでもやはり、a に示した動詞による受身文は迷惑の意味を帯びないが、b に示した動詞では、やはり迷惑性が読み取れる。

(198)a. 与えられる, 贈られる, 渡される, 引き渡される, 受け渡される, 預けられる, 恵まれる, ささげられる, 戻される, 返される, 授けられる, 配られる, 寄せられる, 託される, あてがわれる, ふるまわれる, 供給される, 提供される; 負わされる, 科せられる, etc.

b. 売られる, 貸される, 譲られる, 払われる, あげられる, etc.

例えば、次のような受身文である。

(199) 和夫は良子に {自転車を売られた / 貸された}。

〈被相手要求的態度型 (AA 態度)〉では、迷惑の意味を帯びる動詞はそれほどない。

(628) 頼まれる, 任される, 求められる, 請われる, 要求される, 要請される, 言いつけられる,



仰せ付けられる, 許される, 許可される, 禁じられる, 止められる, 禁止される, 命じられる, 命令される, 強制される, 勧められる, 指示される, 期待される, 望まれる, 断られる, 迫られる, せがまれる, 囑託される, 委託される, 勧告される, etc.

〈被相手への態度型 (AA 態度)〉では, やはり a に示した動詞ではそれほど迷惑性を帯びないが, b で示した動詞では強い迷惑の意味を帯びる。

(200)a. そむかれる, はむかわれる, さからわれる, たてつかれる, こびられる, かしずかれる, かまわれる, なつかれる, とりつかれる, つくされる, やさしくされる, おじぎされる, いたずらされる, ご馳走される, 拍手される, 反対される, 抵抗される, 味方される, 干渉される, etc.

b. 会われる, 従われる, 勝たれる, 負けられる, 慣れられる, 学ばれる, 服従される, 協力される, etc.

特に, 「協力する」や「学ぶ」などは, 動詞の語彙的な意味自体はプラスの態度を表わしている。それにもかかわらず, 受身文になることで, 迷惑の意味を帯びている。

(201)a. 和夫は良子に {協力した/学んだ}。

(202)b. 良子は和夫に {協力された/学ばれた}。

なお, この〈被相手への態度型〉は, 主語に立つ有情者が, 相手ではなく対象であるという点で, 厳密には「あいてのうけみ」ではないだろう。しかし, 対応する能動文において, ニ格で標示されるという点は共通している。

〈被相手動作型 (AA 無変化)〉は, 位置変化動詞で構成され, 主語に立つ有情者は, 対象が行き着く着点=相手である。次のような動詞があるが, いずれもそれほど迷惑の意味は帯びないようである。

(203)(水を)かけられる, (石を)ぶつけられる, 差し出される, (服を)着せられる, (口紅)をぬられる, (化粧を)ほどこされる, (指輪を)はめられる, (銃口を)向けられる; ぶつかられる; 背中にシールを貼られる, 口に棒をつっこまれる, 頬に手をあてられる, ; 仕事を押し付けられる, 麻酔をかけられる, etc.

以上, すべての動詞について詳しく例文を挙げることはできなかったが, いわゆる「相手の受身」の中にも, 迷惑性に中立で, 直接受動文と見なせる受身文と, 受身文になることで強い迷惑の意味を帯びる受身文があることを示した。今後, こうした相手の受身とはた迷惑の受身との関連性や移行関係についても, 詳細な調査が必要と考えられる。

### 4.3 受影性について

本研究では, 有情主語の受身文には, 「有情者が何らかの影響を身に受ける」という受影の意味があるという見解で議論を進めている。典型的な有情主語の受身文においては, この見解は間違っていないだろう。一方で, 有情者が主語に立っても, 「身に受ける」という受影の意

味を読み取りにくい場合がある。受影の意味の表れを、受身文の構造的な問題として考えるのには、現時点では限界があると考えるが、いくつかの傾向を以下で指摘したいと思う。

#### 4.3.1 受影性に関わる構造的要因

次のような対立を見れば明らかのように、有情者、特に話し手（1人称）が主語に立つ「私は～された」という受身文には、何らかの作用・影響を身に受けるという意味が読み取れるのに対し、非情物が主語に立つ(205)のような受身文には、そうした意味はまったく読み取れない。

(204)わたしは、父親に叱られ、頭をたたかれた。

(205)試験が始まり、答案用紙が配られた。

この受影の意味については、これまでの研究で、「利害」(松下 1930)、「affectivity」(Kuroda 1979)、「受影」(益岡 1982)、「被影響」(尾上 1998-9)などの用語で呼ばれてきた。この受影の意味の表れには、多くの論者が指摘しているように、話し手の「視点」が関わっている。金水 1991 は、有情主語の受身文の、主語に立つ名詞句の意味を「受影者」としているが、この受影者「本人は当該の事態から影響を受けていることを知らなくてもよい」(金水 1991:5)と述べ、次のような例文を挙げている。

(206)田中は自分で気づかない間に殺されてしまった。

(207)田中はみんなに悪口を言われていることに自分だけ気が付いていない。(金水 1991:5)

金水 1991 は、受影者本人は影響を受けていることに気づいていなくても、「話し手は〈受影者〉に同情なり嫌悪なり、何等かの感情を抱きつつ接近できるわけで、場合によっては完全に話し手と自己同一化することもできる」とする。また、益岡 2000 は、こうした受身文における受影性は、「主体が直接経験しているものではなく、表現者によって付与されている」(益岡 2000:62)と述べている。このように、受影の意味は、話し手が対象(被動者)の立場に立って、その者に共感し、その者の側=視点から事態を述べるという有情主語受身文の機能と密接に関連しているのである。

また、Tsuboi 2000 は、受身文を徹底して因果連鎖上の《モノ vs.モノ》の関係として捉える立場から、受影の意味は二格に立つ「行為者」によってもたらされるものとした<sup>273</sup>。坪井 2003bでは、次のように述べている。

(208) [受身文における] 行為者性とは、態の違いにかかわらず規定されるような客観的な性質のものではなく、働きかけられる側のその働きかけに対する認識を前提とするような性質のものと考える。受身文自体は主語に起きた変化を語るものであり、行為者の働きかけの部分を相対的に背景化した脱行為的なものとして規定されるが、二格名詞句は主語との間の心理・感情面でのforce-dynamic<sup>274</sup>な働きかけの側面を逆に前景化し、結果として主語が有情

<sup>273</sup> これは、川端 1978 に見られる「関係的な意志」という把握に近いものであるといえる。しかし、川端 1978 は間接受身までも「関係的な意志」で説明できることの論理を明らかにしているわけではない(川村(近刊)参照)。

<sup>274</sup> ここでは、単なる力の流れを表す「因果連鎖」のことではなく、通常あるべき(期待される)力の流れに対して、それとは別の方向から働く力の流れがあるという「力と力のせめぎ合い」という意味で用いているようである(坪井 2002b: 251)。

者でなければならないという視点制約制限が生じることになる。この、受影者の側からの働きかけの認定という要素がさらに強化される形で発達・慣習化したのが、近世以降に発達したと言われる迷惑受身ではないかと思われる。(坪井 2003b:53, 波下線志波)

坪井 2003bの議論は、人格者たる受影者は人格者たる行為者に対して自らに働きかけたこと275の責任を求め、その一方、行為者は受影者に対し事態制御者として(典型的には)意図的行為を及ぼすという《受影者vs.二格行為者》という関係上に〈受影〉の意味が典型的に現れるのだと解釈することができる。

本研究でも、坪井の一連の議論に賛同し、**受影の意味は、受影者に対峙する与影者としての動作主から行為・影響を受けるという二者間の関係上において、もっとも典型的に現れるもの**と考える。有情主語の受身文では、動作主が明示されることの方が多い(志波 2006)のは、この構造的な表れである。

#### 4.3.2 受影性と受身文タイプ

このように、受影の意味には、話し手の「視点」と、二格の動作主の存在が関わっていると考えられる。よって、話し手が視点(共感)を置きにくい、特定性の低い有情者が主語に立ったり、動作主が不特定一般の人々であるような受身文では、受影の意味を読み取りにくくなる。

(209)兵隊たちは、そのままトラックで検問所に送られた。

(210)彼は、寡黙な人柄で知られている。

また、動詞の語彙的な意味によって質規定された本研究の受身文タイプも、ある程度受影の意味の表れに関わっている。(209)のような〈**被位置変化型(AA変化)**〉は、位置変化動詞で構成されるが、この位置変化動詞は他の動詞に比べ、対象である有情者をモノ扱いする側面がある。「彼女は救急車で病院に運ばれた」なども、やはりモノ扱的である。〈被位置変化型〉では、受影者と動作主という二者間の「関係」よりも、主語に立つ有情者の位置的な「変化」の方を問題にする受身文であると考えられる。恐らくこのことと関連して、〈被位置変化型〉では、動作主が特定できない場合も少なくない。

(210)は〈**社会的思考型(I1社会)**〉であるが、〈社会的思考型〉は、動作主が不特定一般の人々である〈**習慣的社会活動型**〉のサブタイプである。よって、動作主が二格で表示されることはほとんどない。しかしながら、動作主の不特定性だけではなく、やはり動詞の語彙的な意味も受影の意味の表れに関わっているようである。(210)の「-デトシテ 知られる」は、

<sup>275</sup> TuboII000では、〈はた迷惑の受身〉についても、受影者が「行為者から働きかけを受けた」と認識することで、その影響=はた迷惑の意味が生まれるとする。しかし、通常〈はた迷惑の受身〉では、その行為者は意志や意図を持って主語に立つ有情物に「行為を仕掛けた」のではないことの方が多い。「和男は良子に先に行かれた」と言ったとき、「良子」にはそうする意図はなかったと認識されるのが普通だろう。Tsuboi 2000はここに「有責性 responsibility」という認知モデルが働くのだとする。

・ 「甲の行為によって甲が意図しない結果が乙に及んだ場合、甲は(より注意深くふるまう等によって)そうした結果を生じさせずにおくこともできたはずであったのにそうしなかったという意味で、甲はその結果に対して責任があり、意図の有無にかかわらず、甲はその結果を引き起こしたものと捉えられる」(坪井 2003b:51)

つまり、〈まともな受身〉であれ〈はた迷惑の受身〉であれ、「行為者」はその事態を仕掛けた「有責者」として追及されるのだということである。

心理的作用を表わす動詞なので物理的働きかけはなく、また、評価性に非常に中立的な意味の動詞で、その場合、受影の意味が表れにくい。〈社会的呼称型 (I1 社会)〉の「-ト呼ばれる」なども、-トで導かれる呼称に評価性が含まれない限り、非常に中立的な意味の動詞で、ここでは1人称「わたし」が主語に立っても、受影の意味を読み取りにくいことがある。

(211)a. (自己紹介などで) わたしは、山ちゃんと呼ばれています。

b. その石はマラカイトと呼ばれています。

一方、〈習慣的社会活動型〉でも、〈社会的評価型 (I1 社会)〉のようなタイプでは、受影の意味を読み取ることが多いだろう。〈社会的評価型〉は、動作主が特定の個人ではなく、また、次の例では主語に立つ有情者も特定の個人ではないが、動作主の対象に対する「評価的態度」を含むことから、受影の意味が表れやすいようである<sup>276</sup>。

(212)第二次大戦後ほぼ三十年間は、経済や経営にしても政治や社会にしても、およそ日本のことについては、「ひどい」「だめだ」「弱い」「おくらしている」といわなければ、インテリの仲間に入れてもらえなかった。「それほどひどくはない」「それほど弱くはない」とひとことつぶやいただけで、「何と愚かなやつか」と嘲笑された。(ゆとり)

(213)こうした投資家や金融機関の変化は、企業にとっては一大事だ。環境先進企業は資金調達で有利になる一方、環境への取り組みがおろそかというレッテルを張られることは、市場から退場勧告を受けるのに等しい重みを持つことになる。(毎日)

### 4.3.3 受影性はどこにあるか

このように、受影の意味は①主語が有情者である、②二格動作主が明示されている、③主語、動作主ともに特定性が高い、④動詞の語彙的な意味の物理的作用性ないし評価性といった、構造的要因にかなり連関していることは確かである。これらの要因が欠けることで、受影の意味を読みとにくくなるのだろう。しかしながら、こうした構造的要因は、最終的には「話し手が視点(共感)を置きやすい」タイプであるということに他ならない。すなわち、受影の意味の表れは、「話し手の視点(共感)」が主語に立つ有情者にあるか否かということに、最終的には左右されるのである。

よって、次のように、公の個人について述べる受身文では、話し手(=読み手)が主語に立つ有情者に共感を寄せれば受影の意味を読み取るし、中立的な立場で客観的事実として読むなら受影の意味は読み取られない。

(214)マリーアントワネットは、37歳のときに処刑された。

「話し手の視点(共感)」があるかないかということは、別の言葉で言えば、主語に立つ有情者が「話し手のウチかソトか」ということだろう。この「ウチ・ソト」という概念は、言語外の、非常に文化的なニュアンスで受け取られがちだが、近年、日本語の人称は、印欧語

<sup>276</sup> ここで、動詞の表わす意味の評価性とは、動作主の対象に対するプラスないしマイナスの評価的態度のことである。当該動作を受けた結果、主語に立つ有情者がプラスないしマイナスの感情を持つだろうと話し手が推測するという意味ではない。例えば、「殴られる」、「連れて行かれる」といった動詞には、評価的な意味はない。動詞そのものの持つ語彙的な意味が、受影性の表れに関与していると考えられる。

の人称システムと違い、話し手のウチにいるかソトにいるかという人称対立がもともとあり、多くの文法現象がこうした人称対立に関連していることが気づかれつつある。近藤 2000 は、こうしたダイクシスに関わる話し手の主観性を取り入れた人称システムを構築していくことが日本語の文法記述にとって重要であることを提唱している。すなわち、日本語の人称システムでは、「私の娘」という指示対象が3人称ではなく、1人称であるということである。こうした日本語に特徴的な人称体系がより深く研究されていくことにより、今後、受影性をより構造的な問題として扱えるようになると思われる。

#### 4.4 従来の受身文タイプと本研究の受身文タイプとの対応関係

ここでは、第1章 2.3 で、体系に位置づけられていない受身文タイプとして紹介した、従来の研究で指摘されてきた受身文タイプと、本研究で立てた意味・構造的なタイプとの対応関係をみる。表にまとめると次のようになる。

表 42：従来の受身文タイプと本研究の意味・構造的なタイプとの対応関係

| 従来指摘されてきたタイプ  | 本研究で立てた意味・構造的なタイプ   |
|---------------|---|
| 心理・生理的状态の受身文  | 有情非情受身文の〈心理・生理的状态型(AI 心理)〉  |
| 状態受身          | 非情一項受身文の〈存在型〉の〈存在様態受身型(I1 存在)〉  |
| 現象描写の受身       | 非情主語非情行為者受身文の〈現象受身型(II 現象)〉   |
| 非人称受身(内容のうけみ) | 非情一項受身文の〈社会的言語活動型(I1 社会)〉、〈社会的思考型(I1 社会)〉及び〈事態実現型〉の〈位置変化型(I1 変化)〉   |
| -ト 呼ばれている     | 非情一項受身文の〈社会的呼称型(I1 社会)〉   |
| 属性叙述受動文       | 主に非情一項受身文の〈習慣的社会活動型(I1 社会)〉(4.1 参照)   |
| 形容詞相当の受身      | 非情一項受身文の〈超時型〉の〈特徴規定型(I1 超時)〉  |
| 定位のための受身文     | 非情非情受身文の〈関係型〉の〈内在的关系型(I1 関係)〉、〈象徴的关系型(I1 関係)〉、〈継承的关系型(I1 関係)〉   |
| 相手の受身         | 有情有情受身文の〈被相手言語活動型(AA 認識)〉、〈被相手提示型(AA 認識)〉、〈被所有変化型(AA 変化)〉、〈被相手要求的態度型(AA 態度)〉、〈被相手動作型(AA 無変化)〉、〈被相手への態度型(AA 態度)〉 |
| 持ち主の受身        | 有情有情受身文の〈被直接作用型〉に多くが含まれる、〈被所有物の変化型(AA 変化)〉  |
| はた迷惑の受身       | 有情有情受身文の〈被はた迷惑型(AA 迷惑)〉   |

このうち、非人称受身については、タイプがいくつかに分かれているため、少し説明が必要だろう。非人称受身としたのは、鈴木 1972 で「内容のうけみ」と呼ばれた受身文である。鈴木 1972 が「内容のうけみ」とした受身文のうち、「-ト 言われる／見られる」という受身文は〈習慣的社会活動型〉の認識動詞による受身文タイプに相当する。つまり、「-ト 言われる」は〈社会的言語活動型〉、「-ト 見られる」は〈社会的思考型〉に相当する。一方、「-ト 書

かれる」という書記動詞による受身文は、これとはタイプが異なる。書記動詞は-トで導かれる内容節を伴うが、構造的には位置変化動詞に近く、書記内容の出現場所である二格の場所名詞と共起する。このため、ラレル形で個別一回的な事態として語られれば〈事態実現型〉の〈位置変化型 (I1 変化)〉であるし、ラレテイル形で存在様態が語られれば〈存在型〉の〈存在様態受身型 (I1 存在)〉であるということになる。

また、「定位のための受身文」については、栗原 2005 の「現れる類」が〈象徴的關係型 (II 関係)〉、「含む類」が〈内在的關係型 (II 関係)〉、受ける類が〈継承的關係型 (II 関係)〉に対応している。なお、「用いる類」については、〈社会的意義づけ型〉にほぼ対応しているようだが、栗原 2005 の挙げている「用いる類」の例では、二格が「意義」ではなく着点=場所を表しており、位置変化的である。そうであるなら、これは〈位置変化型 (I1 変化)〉の周辺に位置づけられるかと考える。

以上が、従来指摘されてきた受身文タイプと本研究の意味・構造的なタイプとの対応関係である。それぞれの受身文の位置づけについて、ここにまとめられれば最良であるが、その余裕がないため、第3章～第6章のそれぞれの記述の中で確認されたい。

## 5 今後の課題

最後に、本研究の分析を終えた現時点において論者（志波）が把握している、本研究の問題点を指摘し、今後の課題と展望を述べたい。

### 5.1 本研究の分類の問題点

分類は、体系を見る上での基盤になるものであり、また、テキストジャンル別にどのような受身文が表れやすいかという相関関係を見る上でも、分類の良し悪しが統計の結果を左右する。以下では、本研究の分類上の主な問題点として、現時点で論者が認識している点について述べる。

#### 5.1.1 態度動詞による受身文について

態度動詞による有情有情受身文には、非情主語の受身文が混在している。これは、非情主語の用例がきわめて少なかった上に、これら数例の受身文の主語に立つ非情物がほぼすべて有情者の所有物であったためである。このため、有情主語の受身文とほとんど意味・機能的な差異が感じられなかった。しかしながら、いくつかの態度動詞では、わずかながら、有情者の所有物ではない、通常非情物が主語に立つ受身文が見つかった。これらの態度動詞については有情主語の受身文とは区別して、非情一項受身文に位置づけている。このように、態度動詞の受身文タイプについては、分類に統一性がない。

態度動詞による受身文には、次のようなサブタイプがある。有情有情受身文の態度動詞によるタイプは〈被態度型〉、非情一項受身文の個別具体的な動作主による態度動詞の受身文タ

イプは〈態度型〉と名づけた。

### 被態度型（有情有情受身文，AA 態度）

#### 被認識的態度型

被感情=評価的態度型 「わたしは彼に嫌われた／笑われた／疑われた」

被知的態度型 「わたしは彼に学生と思われた」

被表現的態度型 「わたしは母親に叱られた／からかわれた」

被呼称的態度 「わたしは彼に母さんと呼ばれた」

#### 被動作的態度型

被評価動作的態度型 「わたしは彼にいじめられた／大事にされた」

被相手要求的態度型 「わたしは彼に掃除を頼まれた」 （相手の受身）

被接近的態度型 「わたしは彼においかけられた」

被相手への態度型 「わたしは弟に歯向かわれた」 （相手の受身）

### 態度型（非情一項受身文，I1 態度）

判断型 「その一件は事故と見なされた」

意義づけ型 「木片がナイフの代用にされた」

要求型 「本部の対応が要請された」

表現型 「森の神々は動物の姿で表現された」

手元のデータを観察する限りにおいて、非情主語であっても有情主語の受身文と意味の変わらないタイプとは、〈被感情=評価的態度型〉、〈被表現的態度型〉、〈被呼称的態度型〉、〈被評価動作的態度型〉、〈被接近的態度型〉である。これらのタイプには、非情主語の受身文が、少数ではあるが、含まれている。一方、〈被相手要求的態度型〉と〈被相手への態度型〉は、いわゆる「相手の受身」なので、そもそも非情物が主語に立つことがない。よって、残る〈被知的態度型〉のみ、数例であるが通常の非情物が主語に立つ受身文が存在したため、〈判断型〉として〈態度型〉に位置づけた。有情有情受身文に分類した、態度動詞による非情主語の受身文の具体的な例については、〈被態度型（AA態度）〉の導入部分（第3章3）で挙げている。

本研究のデータでは、〈被感情=評価的態度型〉、〈被表現的態度型〉、〈被評価動作的態度型〉、〈被接近的態度型〉の非情主語の受身文は、すべて有情者の広義所有物が主語に立つ受身文であった。これらの受身文タイプは、すべて、動作主の対象に対する何らかの「評価性」を含むものである。

また、〈被呼称的態度型〉には、非情主語の受身文は1例も存在しなかった。〈被呼称的態度型〉とは、「N-ト 呼ばれる」に代表される受身文で、このタイプは有情者が主語に立っても、個人の動作主による個別具体的な事態では、用例が非常に少ない。

そもそも、心理的な活動を表わす認識動詞と態度動詞による受身文の、動作主が個人である受身文には、非情主語の受身文がきわめて少ない（2.2 参照）。例えば、感情=評価的態度動詞には、具体名詞から抽象名詞までさまざまな非情物が対象となりうる。しかし、動作動詞と異なり、特に有情者の所有物ではない場合、非情物が主語に立つ個人の動作主の個別具体的な受身文は成立しにくい。

(115)a. 彼は道徳を重んじた／奇跡を信じた／風呂を楽しんだ。

b. ?道徳が（彼によって）重んじられた／?奇跡が信じられた／?風呂が楽しまれた。

一方、非情一項受身文の〈態度型 (I1 態度)〉には、〈判断型〉の他に〈意義づけ型〉、〈要求型〉、〈表現型〉がある。このうち、〈要求型〉と〈表現型〉には、有情者が意志や感情を持った人格者として主語に立つことがない<sup>277</sup>。これに対し、「意義づけ」を表わすタイプには、有情者が主語に立つ受身文もみられるが、ほとんどの場合に動作主の対象に対する何らかの評価性を帯びていた（「のけ者にされる」等）。このため、これはすべて〈被評価動作的態度型 (AA態度)〉に位置づけた。しかし、データの量を増やせば、有情者が主語に立っても評価性に中立的な例は見つかる。今後、有情主語の受身文についても、「意義づけ」をタイプとして立てるべきかとも思われる。

このように、用例の少ない受身文タイプでも、テキストジャンル別の割合を出すのであれば、受身文タイプとして取り出すのが妥当であるのか、また、受身文の構造の持つ意味・機能が、有情主語でも非情主語でもあまり変わらない受身文については、どのようにタイプを立てるべきか、未だ見当の余地がある。

### 5.1.2 習慣的社会活動型の主語について

非情一項受身文のサブタイプである〈習慣的社会活動型〉には、有情主語の受身文が含まれている。〈習慣的社会活動型〉は、心理動詞で構成されており、この問題は上の「態度動詞による受身文」の主語の分類の問題とも関係している。特に、〈習慣的社会活動型〉は、動作主が不特定一般の人々で、反復のアスペクトで述べられるため、主語の有情・非情の別が意味・機能の違いとして表れにくい。例えば、次のような受身文においては、主語の有情・非情の別による意味・機能の差が読み取れない。

- (116)a. 記録に残る女性の最初の登頂は、1832年の高山辰（たつ）とされる。山開き期間外だったことや、キリシタン大名として知られる高山右近の子孫だったことなどから許されたらしい。（毎日）
- b. 現在、白と藍色（あいいろ）の美しい「デルフト陶器」の生産で知られるこの町は、17世紀当時、城壁に囲まれたオランダ有数の商業都市だった。（毎日）
- (117)a. プーチン氏は、昨年8月に首相に就任するまで無名だった。その後、チェチェンの武装勢力に対する強硬姿勢が国民に支持され、最近では「次の大統領に最も近い人物」といわれるまでになった。（毎日）
- b. マラソンが持久力勝負の種目と言われていたころ、女子の記録はいずれ男子を追い抜くのではないかという見方もあった。（毎日）
- (118)a. 鮎太は誰からも、シンドウ、シンドウと呼ばれていた。梶とも、鮎太とも呼ばれなかった。「神童」という言葉がそのまま鮎太の綽名になったのである。（あすなろ.地）
- b. つまり、きわめて単純な形のインパルスとよばれる信号が網の中を走りまわっているのです。（記憶）

(116)は〈社会的思考型 (I1 社会)〉の〈社会的判断型〉、(117)は〈社会的言語活動型 (I1 社会)〉の〈社会的判断言語活動型〉、(118)は〈社会的呼称型 (I1 社会)〉の受身文である。これらの受身文タイプにおける有情主語の受身文は、話し手が被動者に共感してその者の側

<sup>277</sup>「彼女は（キャンパスの上に）黒一色で描かれた」など、有情者が主語に立つ場合も考えられるが、主語に立つ「彼女」は、「彼女の姿」や「彼女の顔」などのメトニミー的な表現であり、意志や感情を持った有情者として扱われているとは考えない。



から、その者が身に受けた影響を語るような有情有情受身文とは異なり、より客観的・中立的な叙述になっている。

一方、同じ〈習慣的社会活動型〉でも、〈社会的評価型 (I1 社会)〉のように、判断内容に評価性が含まれる受身文の場合、有情主語の受身文は、むしろ有情有情受身文に近い意味・機能を持っている場合がある。

(119)「世間のひとたちは、おまえの痛快なあばれぶりに、いまのところは拍手喝采を送っている。だが、きっとそのうちにきらわれるようになるよ」(ブンとフン)

(120)「開業医というものは君、常に患者さんに感謝される医者じゃないといかんよ。ぼくはねえ、いつだって感謝されてきた。[後略]」(榎家)

(121)イギリスの女流推理作家で、多くの読者に親しまれているアガサ・クリスティーの自伝に、次のような一節がある。(ゆとり)

次に、同じく〈社会的評価型〉の非情主語の例を挙げる。

(122)近年は、脳の話がもてはやされる傾向がありますが、人間の行動や精神活動が脳という物質の現象として説明される科学性に新鮮さが感じられるからでしょう。(記憶)

(123)以上のようなことから、とうぜんであるが日本では素材がひじょうに重視される。(たべもの)

(124)ガソリンエンジンに代わる次世代環境技術として本命視される「燃料電池自動車」の開発に要する費用は数千億円ともいわれ、[後略] (毎日)

〈社会的評価型 (I1 社会)〉では、(120)の最初の例や (121)のように、3人称の有情者が主語に立つ場合は、非情主語の受身文と意味・機能的にそれほど差がないと思われるが、(119)や (120)の後の例のように、1/2人称が主語に立つ場合、むしろ有情有情受身文のように、主語への共感や受影性といった意味が読み取れるようである。このように、〈社会的評価型〉は、非情一項受身文と有情有情受身文の境界に位置しながら、両受身文タイプをつなげているようである。

以上、見たように、〈習慣的社会活動型〉は、主語と動作主の有情・非情の別で受身文を原則的に分類している本研究の基準から逸脱したタイプであり、矛盾をはらんでいる。このタイプの位置づけと分類には、検討の余地が残る。

### 5.1.3 「～ト 見られる」について

「句/節-ト」という判断の節を伴った「見られる」において、この-トで導かれる節が名詞文か動詞文かで、受身文の表わす意味が明らかに異なっている。

まず、「N-ト/Adj<sub>連用</sub> 見られる」では、主語が有情者であることが多く、このときは受影の意味のある被動者主役化受身文のように、主語に立つ有情者の主観的感情を表わす外部構造<sup>278</sup>に用いられることも多い。

(125)しかしあいつは生前、俺の友達と見られることをひどくいやがっていた。(金閣寺)

(126)「そりゃ、若く見られるのは嬉しいけど、そんなに若くなれっこはないでしょう」(冬の旅)

判定詞を伴った名詞文がトで導かれる場合も同様である。

<sup>278</sup> 「節-でも困る」、「節-たら大変だ」「節-のは嫌だ」など。

(127) 「[前略]この大あらしで向う河岸には警護の人数が出ているだろう、そこへみんなでぞろぞろいってみる、この仕着の水玉模様を見ただけで、寄場人足の島ぬけだとみられるだろう、そうは思わねえか」(さぶ)

(128) 「普通なら、誰が見てもおふたりは親子だと見られるでしょうが、つまり、ぴんと来たんです。それでパスポートを見たら、歳が開きすぎてる。[後略]」(ドナウ)

こうした「N-ト/Adj<sub>連用</sub> 見られる」ないし「N-ダ-ト 見られる」をまとめて、「名詞文-ト 見られる」という表記で以下では表していく。

一方、「動詞文-ト 見られる。」は新聞テキストに特徴的な受身文で、ほとんど文末で用いられる。これは、「節-スルヨウダ」のようなモダリディ形式にも近づいていると考えられる。

(129) 雅子さまは今後しばらくは公務を離れ、静養するとみられる。(毎日)

(130) パキスタン国営通信によると、同国東部のラホール近郊で12月初め、たるに入った子供のバラバラ死体が見つかった事件で、ジャベド・イクバル容疑者が30日、警察に自首した。逃走資金に困って自首したとみられる。(毎日)

(131) 95年、2回にわたって心臓発作を起こし、もはや政治生命は断たれたと観測されたが96年の大統領選で劣勢を跳ね返して当選。(毎日)

(132) インド政府は交渉団を派遣し、犯人側が要求するイスラム武装組織メンバーの釈放要求をめぐり交渉を続けた。だが交渉団に対テロ特殊部隊を忍ばせ、同時に強襲作戦を練っているともみられていた。(毎日)

しかし、本研究では、これらを別のタイプとして立て、位置づけることができなかった。これらは、同じ〈社会的思考型〉の〈社会的判断型〉に位置づけられている。「名詞文-ト 見られる」は、「判断の構造」を持つことから、典型的な知覚動詞から思考動詞へ移行しているが、未だ「見られる」の語彙的な意味は残っていると考えられる。一方、「動詞文-ト 見られる。」においては、「見られる」の語彙的な意味がかなり漂白化していると考えられる。

今後、この「名詞文-ト 見られる」と「動詞文-ト 見られる。」は別々の受身文タイプとして位置づけることが必要だと考えるが、〈社会的思考型〉は〈社会的言語活動型〉と対応しているところが多く、体系内での組み換えを慎重に考えていかなければならない。

### 5.1.4 有情者の所有物が主語になる非情一項受身文

非情一項受身文には、有情者の広義所有物が主語に立つ受身文も混在している。有情者の所有物が主語に立つ受身文は、割合はそれほど高くないものの、通常非情物が主語に立つ非情一項受身文と異なり、有情有情受身文に近い意味・機能を持つ場合がある。すなわち、主語に立つ非情物の所有者である有情者が影響を受けるという意味を帯び、潜在的受影者のいる受身文として機能する場合である。例えば、次のような受身文がある<sup>279</sup>。

(133) 「とめてくれ、勝あにい」と栄二の下で男が悲鳴をあげた、「おれの眼が潰されちゃいそうだよ」(さぶ)〈状態変化型〉

(134) 自分と祖母の二人だけの静穏な土蔵の中の生活が冴子という闖入者に依って、乱される不安もあったし、一方では反対に、単調な自分たちの生活に突然飛び込んで来た、一匹の華や

279 この他、接触動詞による非情主語の受身文である無変化型も、有情者の所有物か否かで意味・機能的に明らかな違いを見せる。第8章2.3ないし第5章1.2を参照されたい。

- かな色彩の蛾のようなものを失いたくない気持も強かった。(あすなる.地)〈状態変化型〉
- (135)見果てぬ南蛮の香りが体の中にしみ渡っていく。ぎんは今、自分の体が新しい西洋の流れに洗れているのだと思った。(花埋み.地)〈状態変化型〉
- (136)俺たちは、わるいようにはしない。貴様はいままでのことが校長に知られずにすむし、俺たちのことはばれない。(驢馬)〈知的認識型〉
- (137)子供たちに、彼らの画がデンマークへ送られるということを打明けてやりたい気持はたえずぼくのくちびるの内側までのぼってふるえたが、ぼくはなにも話さない決心をした。(裸の王様.地)〈位置変化型〉
- (138)私の背が柏木の尖った指先で押された。私はごく低い石塀をまたいで、道の上へ跳び下りた。二尺の高さは何ほどでもなかった。(金閣寺.地) ☆ 〈無変化型〉

こうした受身文は、非情物が主語に立つという特徴を優先させて非情一項受身文に分類した。しかし、通常の非情物が主語に立つ受身文と異なり、動作主の存在が明示的であることが多いという構造的特徴を持ち、この点では有情有情受身文に類似している。すなわち、動作主が、所有者である受影者に影響を及ぼした責任者として追及されやすいのである。このように、手元のデータを見る限りでは、有情者の所有物が主語に立つ場合は、やはり所有者である有情者が影響を受けるという意味を帯びることがほとんどである。

有情者の所有物が主語に立っても、潜在的受影者がいるとは感じられない受身文も存在するが、いずれも〈位置変化型 (I1 変化)〉である。位置変化動詞による受身文は、有情者が主語に立つ〈被位置変化型 (AA 変化)〉でも動作主の存在が背景化されていることが多く、他のタイプに比べ、受影の意味を読み取りにくいタイプである。

- (139)しかし、彼が京子の軀に加える荒々しい力は、抵抗なくその軀の中に吸収され、かえってその軀を生き生きとさせ、その皮膚は内側から輝きはじめる。(植物群.地)〈位置変化型〉
- (140)台所向きの小道具を除いて、箆筥、長持、鏡台といったぎんの身の廻りのものはすべて部屋へ持ち込まれた。(花埋み.地)〈位置変化型〉

また、個別具体的な事態の発生を語るのではない、きわめて状態性の高い受身文の場合は、所有者である有情者が影響を身に受けるという意味を帯びない。形容詞相当の受身文である〈特徴規定型 (I1 超時)〉や存在を語る〈存在様態受身型 (I1 存在)〉のようなタイプでは、受影の意味を帯びていない。

- (141)そして彼女が後ろむきになって障子を締めたとき、三つ編みにして輪にされた後ろ髪につけられた幅の広いリボンがゆらゆらと揺れた。(楡家.地)〈特徴規定型〉
- (142)両膝にきちんとそろえておかれた彼のきれいにつまれた爪をみて、ぼくはよく手入れのゆきとどいた室内用の小犬をみるような気がした。(裸の王様.地)〈特徴規定型〉
- (143)そういうとき、椅子に坐ったまま首をまわして、井村が熱心に飾り戸棚を見詰めていたことがある。彼が井村の視線を辿ると、飾り戸棚のガラスが鏡の役目をして、恭子の横顔が映し出されていた。(植物群.地)〈存在様態受身型〉

さらに付け加えると、主語に立つ非情物の所有者が動作主である場合は、当然のことながら受影の意味を帯びない。自分と対峙する外的な動作主から行為を身に受けるという意味を持ち得ないからである。

- (144)門礼の後に立っていた加恵は、まさか自分にまで於継が気付くとは思わなかったので、彼

女の視線がぴたりと自分の眉間に据えられたときは、小太刀の先を当てられたように緊張し身動きもできなかった。(華岡青洲.地)

(145) 傷にさわられるときだけ、栄二の顔は痛そうにしかめられたが、そのほかのときは痴呆のように無表情であり、誰の顔をも見ないし、なにをきかれても答えなかった。(さぶ.地)

(146) 冴子は執拗に鮎太の上半身を抱きすくめていたが、やがてくっくつと切れ切れに笑った。

冴子の唇が鮎太の頬に擦された。(あすなる.地)

(147) ヴェスコ・ダ・ガマ、コロンブス、マジェランらの航海が行なわれてから後には、世界を区分けしたのは常に欧州であり、その世界支配過程は不断に進められてきた。(二十世紀)

本研究の分類は、主語に立つ非情物が有情者の所有物か否かという特徴を精査しながら行ったわけではない。よって、すべて一律に非情主語の受身文として扱われることとなってしまう。しかしながら、有情者の所有物であるか否かという構造的な特徴を十分に考慮すれば、各タイプの特徴（位置変化動詞によるタイプや状態性の高いタイプ等）もより明らかになる上、受身文の意味・機能上の分類として矛盾のない分類になると考えられる。今後の課題としたい。

## 5.2 能動文との対照

受身文を研究の対象とする本研究は、その記述の中で、能動文との対照にも可能な限り言及してきた。しかし、当該の意味・構造的なタイプの能動文における特徴や他のタイプとの相互関係については、いまだ記述が不十分であり、特に、能動文の体系と受身文の体系との重なりや違いについては、ほとんどまとめることができなかった。これは今後の大きな課題として残された。また、テキストジャンル別のタイプの分布についても、能動文における分布をも合わせて示せれば、受身文タイプと文脈構造との関連がより詳細に明らかになるだろうと思われる。

ここで、本研究の記述の中で、能動文との対照を調査すべきと感じたいいくつかの受身文タイプについて簡単に述べたい。

まず、呼称動詞による受身文タイプであるが、この呼称動詞による受身文は、非情主語の場合、個別の動作主の個別具体的な例は 1 例も存在しなかったにも関わらず、〈習慣的社会活動型〉としての用例は、非常に多かった。呼称動詞は、奥田 1968-72 では、「表現的な態度のむすびつき」の中で簡単に扱われているだけの動詞であり、受身文のタイプで言えば、〈被表現的態度型 (AA 態度)〉に含まれてもいい動詞である。しかしながら、受身文の用例があまりに多かったため、これを 1 つのタイプとして立てることにしたわけである。今後、呼称動詞による能動文を調査し、比較することで、呼称動詞が受身文に特徴的な動詞タイプであることを明らかにできればと思う。

次に、接触動詞による受身文であるが、接触動詞による受身文は、本章 2.3 でも述べたように、主語 (対象) の有情・非情の別によって、現れ方に非常に差がある。これは、能動文でも共通している現象なのか、異なるのか、今後の調査が待たれる。

最後に、位置変化動詞についてであるが、位置変化動詞による受身文の代表的なタイプには、有情有情受身文の〈被位置変化型 (AA 変化)〉と非情一項受身文の〈位置変化型 (I1 変化)〉がある。本研究のデータでは、このいずれのタイプも、着点=場所と共起する動詞、つ

まり、奥田 1968-72 で言えば〈とりつけのむすびつき〉による例がほとんどであった。本研究の位置変化動詞には、〈とりはずし〉を表わす動詞も含まれるのだが、除去を表わす動詞による〈被位置変化型 (AA 変化)〉と〈位置変化型 (I1 変化)〉は、非常に用例が少なかったのである。これは、受身文に特徴的な現象なのか、そもそも能動文においても除去動詞による用例が少ないのか、今後、調査していきたい課題である。

